
戦国鎮魂歌～ある漢の天下取り～

w i s h

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国鎮魂歌／ある漢の天下取り／

【Zコード】

Z5905A

【作者名】

wish

【あらすじ】

現代とは異なった時間が進み、未だに戦国時代が続く別世界。この小説では夢に見た戦国武将達のもう一つのお話を進めていきます。

第一話 過去の話（前書き）

この物語はフイクションです（人名・地名・城名を除く）この小説を読むに当たってこいつかQ&Aを上げたいと思います。

Q：俺の好きな戦国武将が登場しないんですけど。

A：評価欄に載せてくればよく吟味した上で登場するかしないか決めます。

Q：なんか実際の地名や城の作りが違うんですけど。

A：作者の知識不足ですので具体的にどんどん指摘してください。

Q：なんかキャラが違うんですけど・・・。

A：これは フ ィ ク シ ョ ン です。

Q：転んで血が出たんですけど・・・どうすればいいんですか？

A：消毒して絆創膏を貼ってください

第一話 過去の話

時は戦国時代、数多の群雄が興つては消えていった時代である。

優れた名君をあげるとするならば・・・。

織田信長・武田信玄・上杉謙信・徳川家康・豊臣（羽柴）秀吉・伊達政宗・毛利元就であろう。

また知略を持つて敵に立ち向かい、あるいは敵・味方を陥れて主家を乗つ取つたり家中で勢力を伸ばした人物としては・・・。

竹中半兵衛（織田）・黒田官兵衛（織田・羽柴）・松永久秀（筒井）・宇喜多直家（浦上）・直江兼続（上杉）・山本勘助（武田）・太原雪斎（今川）などが有力であろう。

古今無双の豪傑と後生に名を残し、今もなお人々に敬意をもたれている武将は・・・。

本多忠勝（徳川）・服部半蔵（徳川）・前田利益（織田・前田・上杉）・柴田勝家（織田）・立花道雪（大友）があげられるであろう。そして愚直にまで主君に対して忠義を貫き通した人物と言えば、

真田信繁（武田・真田・豊臣）・石田三成（織田・豊臣）・小早川

隆景（毛利）・後藤又兵衛（黒田・豊臣）であろう。

そんな数多の英傑達を生み出した戦国時代は既に過去の遺物となってしまった・・・。

今では彼らの存在を残す文書や碑文が残つてはいるだけである。

だがもう一つの別世界ではまた別の戦国絵巻が繰り広げられていたのである・・・。

パラレルワールド

第一話　過去の話（後書き）

えー・・・」こんな初心者丸出しの小説を読んでくださってありがとうございます。

これからもどうか政をどうかよろしくお願いします。

第一話～下弦の月の裏～（前書き）

早速の「」指摘有り難う御座いました。

第一話における訂正：×松永久秀（筒井）

松永久秀（三好）

これからも「」指摘お願いします

第一話～下弦の月の裏～

- 尾張 清洲城下 足軽長屋 -

尾張を統治する織田信長、彼の一大転機と言える桶狭間の合戦は存命中の今川家軍師・太原雪斎の進言によつて義元による上洛は阻止された。

桶狭間で表舞台に躍り出る機会を失つた織田信長は領国の經營に力を入れ、丹羽長秀・浅野長吉（後の浅野長政）・佐久間信盛・木下簾吉郎らの優れた文官を奉行に命じて石高向上を推し進めていた。野戦や籠城戦において兵糧はまさに合戦を左右する生命線と言える程のものであつた、ちなみにこの時代の兵糧は現代における自衛隊の戦闘糧食（おにぎりとか缶詰とか）と違つて一度炊いた米を天日で乾かした物をさすのである。

木下簾吉郎の元に仕えている足軽頭・清右衛門は下弦の月を眺めて静かに酒を飲んでいた、酒と言つても清酒のような高級酒では無く安酒である濁酒である。

一緒に酒を飲むのは童時代からの友人達である松之助達である、彼らは名も無き足軽達であるが天下に志を立てていたのだ。

「よお！…やつてるねえ！！」突然の訪問者に清右衛門達は硬直した、何と上司・木下簾吉郎が妻であるねねを連れてきたのである、簾吉郎の手には大きめの徳利が握られていた。

「さ、木下様！！何故このような所に！！」清右衛門が慌てて頭を下げて伏した、それもそのはず木下簾吉郎は「毛作などの優れた耕作技術を発明し信長をして『尾張随一の米人』と褒め称えられて侍大将に昇進していたのだ。

「いかんかね？」籠吉郎が草鞋を脱いで人なつっこい笑みを浮かべて聞いた、籠吉郎はねねの手を引いて静かに畳の上に座つて徳利の酒を清右衛門達の壊れ掛けた杯に酒を注ぎ始めた。

「こゝ、これは・・・直々に・・・恐縮です」松之助が頭を何度も下げてその杯の中身をじーっと見始めた、今まで一度も飲んだ事が無い清酒が注がれていた。

「今日は無礼講じや！・！飲め飲め！」籠吉郎が笑いながら叫んだ、そのまま宴は楽しく進み踊りや歌声が鳴り響いた、この人なつっこい性格は昇進してからも相変わらずであつた。

そして宴は夜中まで続き殆どの者が酔いつぶれていた、無論清右衛門達は疲れて眠りこけていた。

「お前様・・・随分陽気な方達ですね」ねねが籠吉郎の杯に酒を注いで言った、籠吉郎はうつすらとした笑みを浮かべてコクリと頷いた。

「こゝも合戦となつたら真つ先に死ぬのはこゝつら足輕達・・・ワシも元は足軽だつた、だからこゝつらの不安はよく解る・・・だからせめてワシがこいつらの不安を受け止めてやらなければならんだろう？」籠吉郎がボンヤリと夜空に輝く下弦の月を眺めて呟いた。

『木下様・・・』いつの間にか目を覚ましていた清右衛門が流れそうになつた涙をグッと堪えて肩を震わせた、

清右衛門はこの時を境に籠吉郎の為ならば不惜身命の覚悟で働く事を己の涙に誓つた。

第二話～清洲評定～

織田信長は喜怒哀楽の激しい人物で悪逆非道の第六天魔王と後世では伝えられているが、実際は優れた人物であるのは作者の勝手な考えである。

1) 優れた人材を発掘し、早くから簾吉郎や滝川一益等の有力な人材を発掘していた、また降将にも寛容な処置を施した（例：松永久秀・磯野和昌等）。

2) 自ら政治に深く携わり民と共に祭りと言った行事や灌漑路の建築の指揮を取っていた。

3) 旧体制（幕府・朝廷）を否定しそれに代わる組織を考案していった。

4) 茶の湯などの文化普及の一役を担い、また狩野永徳などの優れた画家の活躍の場を与えた、それだけでなく夜盗同然の武士達に茶の湯や礼儀作法を教え込んだ。

以上四つの事を考えると決して悪逆非道の第六天魔王では無く乱世の名君であったのでは無いだろうか？

話は下弦の月の宴から一週間後、蟬の鳴き声が止んで代わりに鈴虫などの鳴き虫の心地よい音色が聞こえてくる秋を迎えていた。

だがこの時期は織田家に取つて悩みの種の時期でもあった、美濃の斎藤義興や伊勢の北畠晴具・三河の今川義元等の軍勢が略奪目的で尾張に攻め込んでくる時期であったのだ。

この日、簾吉郎は信長に呼び出されて初めて評定の間に入った、そこには柴田勝家・丹羽長秀・池田恒興・滝川一益・林秀貞・佐久間信盛らの織田家重臣が側に控えていた。

「木下簾吉郎、ただいま参上仕りました・・・」

簾吉郎が畏まつて参上の口上を述べた、信長は上座から静かに簾吉郎を睨み付けていた、思わず簾吉郎は背中に嫌な汗をかいた。

「猿・・・貴様に鳴海城の守備を申し渡す、先に病死した佐久間大學（信重）に代わり、かの城を守り抜け・・・」

信長が静かにだが良く響き渡る声で簾吉郎に命令を下した、鳴海城は尾張防衛の要であり度々今川勢と小競り合いを起こしていた場所であった。

「はっ！..しかと承りました！..この簾吉郎、身命に代えて御役目をはたします！..」

簾吉郎が頭を下げたまま返答した、その時信長がスクッと立ち上がり簾吉郎に歩み寄つた、無論重臣一同が驚いたのは言う間でもない。

「猿、又左（前田利家）・長吉・太田牛一を貴様の与力として使わす・・・存分に働けい」

信長が簾吉郎の肩をポンと叩いて言った、前田利家・浅野長吉・太田牛一は共に簾吉郎とは顔見知りで浅野長吉とは妻ねねの兄で義兄弟の間柄であった。

ちなみに太田牛一とは後に『信長公記』等の著作を世に残した人物である、また弓の名手でもありその腕前は家中でも一、二を争う程度であった。

「は、はっ！..有り難き幸せ！..では、早々に鳴海に出立します！..御免！..」

簾吉郎が深々と頭を下げて足早に評定の間を出て行つた、残つた重臣達の内柴田勝家だけはどこか不服そうな顔をしていた。

「なんじゃ 権六？何か不服でもあるのか？」

信長が不服そうな顔をしていた勝家を見て聞いた、柴田勝家はかつて林秀貞と共に信長の弟である織田信行（信勝）を擁立して謀反を起こした人物であった。

しかし一度敗れて許されたにも関わらずまたも謀反を企てようとした信行を見放し、信長に密告して殺害する様にし向かたのである、その功績により織田家筆頭家老として信長に仕えていた猛将であった。

「何故に大殿はあの薄汚い猿に目を掛けられているのか・・・拙者には理解しがたいです」

勝家が率直に自分の意見を述べた、勝家は小牧山城の守護に付き長年斎藤家と渡り合つた人物で新参者である籠吉郎の台頭を理解出来なかつたのである。

「勝家殿・・・大殿には何か考えがあるに違いありません、我らが口出しだす事ではないでしょう」

勝家の隣に控えていた長秀が即座に勝家を諫めた、長秀は知略と政治に長けた人物で信行謀反の時も信長に忠義を尽くして反乱軍と戦つたのである、また史実では足軽だった籠吉郎に早くから目を掛けているそれとなく助言する事もあつた。

だが史実では本能寺の変の後に信長の遺児である織田信孝と共に四国征伐に赴いており、信長死すを知つた長秀は信孝を連れて山崎の秀吉軍と合流させたのである、しかし道中信孝が従兄弟である津田信澄を攻めるのを反対したがかなわなかつたのである。

「五郎左の言つ通りじゃ・・・余には余の考えがあるのじゃ

信長がフンと鼻を鳴らして勝家の意見を一蹴した、もし籠吉郎が鳴海を守り抜けば即座に取り立て守り抜けなければ腹を切らせる・・・それだけであった。

信長にとって勝家も長秀も籠吉郎も所詮は自分の道具に過ぎなかつた、使えぬ道具は捨てるのが信長の主義であつた。

かつて三国時代の魏の王・曹操が『例え罪人でも不義の者でも才能が有れば取り立てる』（唯才）と言つた様に信長も同じ轍を踏んだのである。

つまりは籠吉郎の才覚を問われた一戦であるのだ、無論それは籠吉郎にとつても百も承知であつた。

そして、この戦を切つ掛けに清右衛門達も歴史の渦に投げ込まれ、その存在を世に知らしめる事になるうとはこの時信長も彼ら自身も解つていなかつた・・・。

第四話～篠吉郎の決断～（前書き）

PC破損の為執筆が大分遅れました・・・。
申し訳無いです・・・。

第四話 篠吉郎の決断

- 尾張と三河の国境 -

篠吉郎は鳴海城に着任して早々、今川家の軍勢一万余が尾張と三河の国境地帯に集結しているとの報告を受けた。

篠吉郎は前田利家・浅野長吉・太田牛一・木下小一郎の名だたる将と兵七千八百を率いて鳴海城南方一十里の地点に布陣した。

無論今川家は病死した佐久間大学信重の代わりに鳴海城に赴任してきた『木下篠吉郎』なる人物を評価する為の侵攻であった、いわば小手調べである。

今川家の総大将は幼き頃から今川家の入質として元服して松平元康（徳川家康）以下本多忠勝・本多正信・榎原康政・酒井忠次・鳥居元忠と勇猛果敢で忠実な三河軍団であった。

篠吉郎は早速寄騎衆や足輕頭等を招集して軍議を開く事とした、数の上でも将の質でも劣る織田軍は今川軍と正面から衝突されれば木つ端微塵にされるのは良く心得ていたのである、故に議論が白熱したのは言つまでもない。

「篠吉郎、ここは鳴海城に籠城して大殿の援軍を要請してはどうじやろか？」

篠吉郎とは義兄弟の間柄にある浅野長吉が籠城策を主張した、だが決して篠吉郎は首を縊に振らなかつた、信長に気に入られる為には華々しい戦果を上げなければならないのは重々承知していたのである、もしもここで敵に背を向けて逃げ出せば一度とチャンスは与え

られないのである。

「どうじゃ？ 篠吉郎、ならばいつその」と敵陣に突撃して一か八かに賭けるか？」

利家がへラへラ笑つて「冗談を言つた、利家は篠吉郎とは親友で家族ぐるみのつき合いもしていたのである、その瞬間篠吉郎の顔色が変わっていた事に誰も気が付かなかつた。

「利家殿・・・冗談を言つてる場合では無いでしょう」

篠吉郎の実弟・小一郎（秀長）が即座に利家に突つ込んだ、小一郎は元々清洲で農民をやつていたが篠吉郎の出世と共に篠吉郎に仕えた文字通り股肱の家臣の一人であつた。

「いや・・・それで行くしかないだろ？」「う

篠吉郎が即座に決断した、全員がまさかと言つ顔をして上座の篠吉郎を見た、清右衛門達足軽頭にも無謀である事は即座に解つた、相手は精銳三河軍団、対する織田軍は寄せ集めの半農半兵の兵達であったのだ。

「篠吉郎殿・・・」「冗談でしょ？」「う

牛一が即座に異議を申し立てた、牛一はかつて信長と共に三河侵攻作戦に加わつていてその手強さを知つていたのだ、勿論織田軍は壊滅して信長はその雪辱に燃えていたのだ。

「たわけ！－ワシら農民から成り上がつた者が出来するにはそれしかないじゃろうが！－」

温厚な篠吉郎が珍しく声を張り上げた、篠吉郎は焦つていたのだ、その声に思わず皆が黙り込んでしまつたのだ。

「では先陣は俺が務めよう！－！」

利家が自ら提案した策に責任を持つかの様に立ち上がった、利家は織田軍でも数少ない猛将の一人でありその名は遠く三河までも聞こえていたのである。

だがその頃対陣の松平軍に一人織田軍を睨み付ける男達が立つていた・・・。

そしてこの男こそが清右衛門にとつて生涯の好敵手であり篠吉郎にとつて最大の脅威となる男達であった・・・。

一人は戦国最強・本多平八郎忠勝、もう一人は戦国の申し子・松平元康であつた・・・。

第四話～篠崎島の決断～（後書き）

意見をくださつたオーティンさん！…有り難い♪それこまかーー！
これからもやのむ言葉を励みにがんばりますーー！

第五話～鳴海の合戦・上編～（前書き）

初めての合戦話ですが・・・もつ何と言つか素人丸出（以下略
間違つた所があればどんどんご指摘ください
あと・・・評価もして貰えれば嬉しいです

第五話～鳴海の合戦・上編～

- 織田軍 最前線 -

籠吉郎の無謀とも言える特攻作戦には皆が一斉に反対したが、籠吉郎の強引なまでの言葉に全員は渋々従わざるを得なかつた。

無論、清右衛門達足軽にとつては迷惑この上無い話であつた、だが清右衛門はあの下弦の月に誓つた言葉を覆す訳にはいかなかつた。

「なあ・・・清右衛門・・・ワシ等死ぬんか？」

清右衛門の隣でガタガタと震えていた足軽がボソボソと呟き始めた、この中には初めて合戦に臨む者も少なくなく殆どは実戦経験など皆無であつた。

清右衛門は農家の三男坊であつたが十三の時に織田家の志願兵募集の高札を見て志願、その後丹羽長秀の麾下に入り織田信勝謀反鎮圧に従軍して足軽頭に昇進したのである。

「解らん・・・戦場で生き残るには相当な強運が必要だからなあ・・・」

清右衛門がボソリと呟いた、事実清右衛門自身も幾度も戦場に赴いたが一度も怪我をした事が無かつたのだ。

その時戦場に織田軍の陣太鼓が鳴り響いた、と同時に先駆け隊として前田利家率いる騎馬隊一百あまりが怒濤の勢いで敵陣に突っ込んでいった。

「掛かれい！－！」

籠吉郎が自ら馬に跨り勇ましく叫んだ、浅野隊・前田隊・小一郎隊・

太田隊も同時に敵陣目がけて勢いよく突っ込んで行った、清右衛門は得物である長槍を地面と垂直に持ち上げて掛けだして行った。

本来槍は突く為の物では無く相手を叩き殺す為の鈍器であった、一斉に足軽達が槍を振り下ろして敵の兜目がけて振り下ろすのである。

ちなみに甲陽軍艦におもしろい記述がある、騎馬武者と言えば馬上で勇ましく槍を振り回す姿を想像するが、実際馬上で槍を振るには二つの問題がある。

一、馬上で重心の問題である激しく揺れる馬上で槍を振り回せばバランスを崩して落馬する。

二、片手で馬を御すのは不可能でただでさえ敵味方入り乱れている中では益々馬を御すのは至難の技である。

以上の事から馬上で槍を振り回す騎馬武者は存在しなく、実際は馬で敵を踏みつぶした後に馬から下りて戦つてるのである、これはかの戦国最強と言われた武田騎馬隊も例外では無かった。

「弓隊！…前へ！…各個自由射撃！…」

敵方の総大将・松平元康が麾下の榎原隊に命令を下した、榎原康政と言えば今川家でも本多忠勝と一、二を争う猛将で統率力に優れていた、また多少なりとも策を用いていた、史実では小牧長久手の合戦の折りには豊臣方に向かって秀吉の悪口を叫ばせて秀吉に十万石の賞金を掛けられた程であった。

弓につがえられた矢は勢いよく清右衛門達の陣に向かって飛んで行つた、目の前の足軽が顎を割られ倒れざまに胸を射抜かれて倒れた、それでも清右衛門達は前の味方を押して前進し続けた、やがて矢の射程圏外に入つた時には既に半数近くが負傷していた。

「うおおお！！退けい！！」

利家が馬で榎原隊に突入して行った、不意を突かれた上に本陣第一部隊の猛攻を直に食らった榎原隊は後詰めの本多隊と素早く入れ替わった。

「がはつ！！」

利家の隣で馬に乗っていた騎馬武者が突然突き出された槍を胸に食らって勢いよく飛んで行つた、そこには戦国でも類を見ないほどの豪勇を誇り戦国最強の称号を持つ武神・本多平八郎忠勝が馬上の人となつていた。

「おお！！本多様じや！！」

忠勝の姿を見た今川軍の者達が口々に叫んだ、利家はその忠勝の威風堂々かつ剛胆を名体した様な姿に身震いした、戦国最強・本多忠勝に槍を付けられるなんて千載一遇の出来事であつたのだ。

「本多忠勝殿とお見受け致す！！俺は織田家侍大将・前田又左右衛門利家！！いざ尋常に勝負！！」

利家が名乗りを上げて忠勝目がけて馬を走らせた、槍を脇に構えて忠勝の胸目がけて槍を突き出した、だが忠勝は素早く槍を捨てると腰の太刀を抜いて槍の穂先を叩き斬つた、そうこれが本来の馬上での戦い方であつた。

「ぬん！！」

忠勝がそのまま太刀の切つ先を返して横に薙いだ、利家の馬は首を刎ね飛ばされて膝を屈する形で転げた、その衝撃で利家は勢いよく宙に放り出されて腰から地面に叩き付けられた、腰を強打し情けなくも腰が抜けてしまつたのである、目の前には太刀を振り上げた忠勝の姿があつた。

『も・・・もはやこれまでか・・・』

利家が死を覚悟した瞬間、突然雷光の如き早さで長槍が飛んできて忠勝の馬の頭を貫いた、忠勝は軽く舌打ちすると空中で一回転して見事に着地した、そして槍が飛んできた方を見るとそこには意外な人物の姿があった。

「き、清右衛門！？」

利家が腰を押さえて叫んだ、そこには槍を投げた格好のまま呆然と立ちつくしている足軽頭・清右衛門の姿があった、忠勝は戦いに文字通り横槍を入れられた事に激怒して利家に目もくれず清右衛門目がけて駆けだした。

「に、逃げい！清右衛門！お前の勝てる相手じゃない！…」

簾吉郎が忠勝と対峙する清右衛門の姿を見て忠告した、その声にハツと我に返った瞬間清右衛門は目の前の光景に改めて度肝を抜かれた、鬼の形相でこちらに向かってくる武将に清右衛門は失神しそうになつた。

頭で考えるよりも先に体が勝手に反応した、腰を抜かす様な形で尻餅を突いて横薙ぎの斬撃を避けるとそのまま横に転がつて振り下ろしの斬撃をも回避したのである。

「木つ端兵の分際で俺の斬撃を避わすとは・・・お前、名は？」

忠勝は地面にめり込んだ太刀を引き抜いて清右衛門をジロリと睨み付けて聞いた、その冷静な言葉とは裏腹に内心驚いていた、雑魚と踏んだ相手に一度も全力の斬撃を避わされたのである。

「お、俺の名は・・・小牧村の清右衛門じゃ！…」

清右衛門が度盛りながらも名乗りを上げた、くしくもこれが戦国乱世にその名を轟かせる漢の最初の名乗りであった・・・。

第五話～鳴海の合戦・上編～（後書き）

作者のビリーモーニング田尾

最近、Battlefield 2にまつてる作者です。

アカウント名は eco-wood (こやな) です (これ書いて良いのかな?え、駄目?・・・駄目っぽい?)。

よく日本サーバーで遊んでますんで見かけたら「ああ・・・あいつ満足に小説も書けないくせに遊んでばっかいやがって・・・」って思ってください

第六話～鳴海の合戦・中編～（前書き）

戦国最強・本多忠勝と対峙した清右衛門。

お互いに守る者の為に戦つ同士の激しい一騎打ちの幕が開けようと
していた・・・。

激闘の鳴海の合戦の中編です。

第六話～鳴海の合戦・中編～

戦国最強・本多平八郎忠勝、幼き頃から松平元康に仕え、信頼厚き猛将である。

諸武芸に優れ三方原～関ヶ原と数々の合戦に従軍し、榎原康政・井伊直政・酒井忠次ぐと並んで徳川四天王の副筆頭格でもあった。

その凄まじき武を武田信玄には『家康に過ぎたる物が一つある唐の頭（兜）に平八（忠勝）』・秀吉には『古今独歩の勇士』と賞賛された程もある。

また三河武士らしく主君には絶対の忠誠を誓つていて伊賀越えの折りにも服部半蔵と共に家康をその身で守り抜いた程であった。

酒井忠次・井伊直政・榎原康政と並んで徳川四天王にも数えられた、また政治手腕にも優れ関ヶ原の戦いの後に桑名に転封した折りに城下町の発展にも貢献したのである。

だが、今は元康に仕える一人の武将に過ぎなかつた、元康配下として各地を転戦しその勇名は遠く京にもおよんでいたほどであった。

清右衛門はそんな戦国最強・本多忠勝と対峙していた、逃げだそうとする瞬間に背中から斬られるのは重々承知していたのだ。

「清右衛門殿か・・・その武と度胸誠に見事なり・・・ならばこのの」
本多平八郎忠勝、全力でお相手仕ろう・・・

忠勝が足下に転がっていた槍を拾つて清右衛門に向けて言つた、清右

衛門も震える手で槍を拾い上げた、この一人の周りでは死闘が繰り広げられていたにも関わらず、一人の耳には己の息づかいだけが聞こえていた。

先に仕掛けたのは忠勝である、忠勝はまるで最上川の急流が如し早さで槍を突き出した、清右衛門は間一髪でその突きを回避し槍を横薙ぎに振るつた。

だがそこは歴戦の勇士である忠勝は素早く手首を返して槍の柄でそれを防いだ、それと同時に清右衛門の胸目がけて槍を薙いだ、清右衛門の胸に鋭い痛みが走りなま暖かい血が少し流れ始めた。

「痛つ・・・」

清右衛門がチラツと胸を見ると鎧は見事に横一文字に切り傷が走つてそこから少しだけ血が滲んでいた、幸い槍の穂先が向かつてきた瞬間に身を退いた為に浅い傷で済んだのだ。

『打ち込みは素人並だが・・・即座に身を退いて被害を軽減させるとは・・・間違いない、この男はどんどん強くなる・・・俺と同等、いやもしかすると・・・』

忠勝が少し息を乱れさせて清右衛門の振る舞いに感嘆した、忠勝は叔父に槍術を学び達人の領域にまで極めたが清右衛門は実戦で技を極めたのである。

その一瞬の隙を清右衛門は見逃さなかつた、忠勝が息を整えてるわずかな隙を突いて忠勝目がけて思いつきり槍を投げつけた。

「小賢し・・・速い！！」

忠勝が槍を振るつて清右衛門が投げた槍を叩き落としたしたが、そこには清右衛門の姿は無かつた、しまつたと思つて下を見ると清右衛門が忠勝の腰に差していた太刀を素早く抜いて斬り付けようとした。

ていた。

清右衛門はもう無我夢中で忠勝の大剣を振り下ろした、その刃は斬撃を防ごうとした忠勝の槍の柄を叩き斬り忠勝に軽く食い込んだ、戦国最強の誉れ高い忠勝が生まれて初めて傷を負つた瞬間であつた。

「ぐつ・・・完敗だ、我が首持つて武門の末代までの手柄と致せ・・・」

忠勝が激痛が走る肩を押さえて呻いた、これ程の男にならばこの首をくれてやるのは惜しくないと悟ったのである、だがその時既に清右衛門の体力は限界を迎えていて膝が震えて上手く立てずにいた。

「取るうにも力が・・・ここは退いてくれぬか?」

清右衛門が剣を杖にして呻いた、その顔には疲労の色が滲んでいた、武術の心得がある者は解るが集中力が極限まで達しその集中力が途切れた瞬間にもの凄い疲労感に襲われるのである。

「ふつ、本当に不思議な男よ・・・その剣は貴殿に差し上げよう、
その剣で此度の武勲の証となれりつ・・・」

忠勝が腰に差していた剣の鞘を清右衛門に投げ渡して言った。忠勝はこの男に惚れ込んでしまったのである、そしてその言葉はまたいつの日か戦場で戦おうと叫う意味も含まっていた。

結局清右衛門は忠勝の首を取らずに逃がしてやつた、その好意に甘えて忠勝は撤退、清右衛門・利家も怪我により戦線を離脱して行つた・・・。

この鳴海の合戦は清右衛門の奮闘により引き分けで終わり、国境にて両軍による睨み合いが半月近く続く事となつた・・・。

第六話～鳴海の合戦・中編～（後書き）

ついでやくテストも終わり一段落付いたこの辺り。
でも結果を見て益々勉強が嫌いになりました・・・。

第七話～鳴海の合戦・下編 清右衛門の改名～（前書き）

鳴海の合戦は引き分けで終わった、だがそれは今川家滅亡へ序章に過ぎなかつた・・・。

第七話／鳴海の合戦・下編 清右衛門の改名／

清右衛門と本多忠勝の死闘から約一週間が続いた、尾張方は打つて出る素振りも見せず三河方も城を攻める素振りも見せなかつたのである。

元康はこの戦いで木下籠吉郎なる人物に若干の恐れを抱いた、清右衛門の奮闘で忠勝が戦線を離脱した為に今川軍の士気を落ちる所まで落ちたのである。

その様な豪傑を従え、仰天同地の策を用いる籠吉郎に並の戦略は通用しない事を改めて認識したのである、だがそこに思わぬ報告が舞い込んだ。

今川義元が駿府城にて倒れて危篤状態に陥つたのである、そこで元康は師であり今川家軍師・太腹雪斎にこの合戦の和平仲介を求めたのである、雪斎はそれを承諾して鳴海城へと向かつた。

- 鳴海城 大広間 -

今、大広間には籠吉郎と前田利家・木下小一郎・浅野長吉・太田牛一そして遙か下座に清右衛門が座つていた。

そして籠吉郎の前に座る男こそ今川家随一の戦略家で元康の師匠である太原雪斎が和平の使者として堂々とした態度で座つていた。

「つむ・・・その条件ならばこちらも了承しよう、では義元殿・・・いや新当主・氏真殿には織田家を代表してよろしくお願ひ致す」

籠吉郎が太原にあくまでも強気な態度で会見に臨んだ、籠吉郎はあ

くまでもこの合戦の勝者は織田家であると言わんばかりの態度であった。

「至極承りました・・・織田殿には私のほうから伝えておきます
既に齡六十を超えていた雪斎が籠吉郎に頭を下げた、ここに織田と
今川双方による事実上の和平が成立したのである。

しかしこの二ヶ月後に太原雪斎、そして今川義元も相次いで病で世
を去り、新しい当主・今川氏真を支えるはずであった松平元康も三
河で独立し北条・武田・今川の三国同盟を破棄され今川家は歴史の
表舞台から消え去ろうとしていた・・・。

- 三ヶ月後 清洲城 -

清右衛門は籠吉郎と共に信長から呼び出しを受けて清洲城に登城し
た、そこには相も変わらず織田家の重臣達が挙つて信長の側に控え
ていた。

だが合戦前と違つて勝家も籠吉郎に対して卑下した考えは持つてい
なかつた、勝家はいつも通り小牧山城の防衛に付いていたが大した
戦功も上げられずに信長に叱責されたのである。

「猿・・・此度の役田^{ハシメ}」苦労であった・・・お主を部将に任する、
これからも励め・・・」

信長が珍しく機嫌が良さそうに籠吉郎を褒めた、籠吉郎が頭を下げる
間に一人場違いな格好をした清右衛門に目線を移していた、清

右衛門はその視線に気が付いて慌てて頭を下げる。

「清右衛門とやら……お主、あの本多忠勝を打ち負かしたと聞くが誠か？」

長秀が信長の代弁として清右衛門に聞いた、既に織田家は篠吉郎と清右衛門の武勲の噂で持つきりであったのだ、無論長秀もその噂の真偽の定を確かめたかったのである。

「は、はい……忠勝殿はこの剣で武勲の証とせよと

清右衛門が薄汚い袋で包んだ刀を献上するかの様に長秀に差し出した、長秀は袋に手を入れてずしりと重い剣を取り出した、その瞬間その場にいた全員が驚きの声を上げた、信長も目を丸くしてその剣を見ていた。

「むう……あれは真に本多平八郎忠勝の愛刀……噂は本当であったのか」

勝家も思わず唸つた、勝家も何年か前に一度本多忠勝と槍を交えたがたまらず逃げ出してしまつのであつた、その本多忠勝を打ち破つた者がいると聞いて最初はその噂自体を否定していたが、この目でその剣を見た瞬間に容認してしまつたのであつた。

「ガハハハハ……清右衛門、見事じゃ……お主こそ家中随一の勇士よ……」

信長が高笑いを上げて清右衛門を褒め称えた、信長に認められるという事は家中でもその実力を認められ値千金の価値がある事であった。

「は、ははっ……有り難き幸せに御座います……」

清右衛門が床に頭を打ち付けるように呉まつて礼を述べた、その横で篠吉郎はただ黙つて微笑んでいた。

「つむ……お主を足輕大将に任ずる……名字帶刀も許可する……今後は籠吉郎と共に今川攻めに励め……・・・して、そちは自分の名を何とするのじゃ？」

信長が上機嫌に清右衛門に言つた、わずか十七にして織田家の家臣となつたのである、だが清右衛門はあくまでも籠吉郎より身分は下であった。

「はつ……恐れながらもこれより須藤清則と名乗らせて頂きます！」

清右衛門改め清則が頭を下げて言つた、元々清則の家系は遡ると清和源氏の末裔で彼の亡き祖父の名・須藤松右衛門から取つた名であった。

須藤清則、彼は今改めて戦国時代のまつただ中に立つ一人の武将となつたのである、その名はやがて戦国の世に響き渡る程となろうことは信長を始め重臣や籠吉郎、そして本人も知る由がなかつた……。

第七話～鳴海の合戦・下編 清右衛門の改名～（後書き）

次回は今川家について少しふれたいと思います・・・。
まだまだ未熟ですがなにとぞよろしく御願いします。

第八話～曳馬城攻め～（前書き）

あ～・・・なんかもうすみません。
何で謝ってるつて？
更新が遅れた事ですよ

第八話～曳馬城攻め～

東海地方でも類稀な名門・今川家、その歴代当主は文武に優れた名将が多かつた。

今川義元の兄・氏輝・義元とわずか一代に渡つて尾張・松平家を支配していたところを見ると武田・上杉・北条に並ぶ程の名門であるのはいうまでも無い。

今川義元の軍師であり教育係であった太原雪斎の進言により今川・北条・武田による三国同盟が成り立ち、その勢力はますますをもつて強大化の一途を辿つていた。

だがその今川家の前に立ちはだかったのが尾張・織田家であつた、長きに渡る攻防戦に終止符を打つべく義元は上洛の準備を整えていたが突如、雪斎が病の身を押して出兵に熱心に反対したのである。

かくして織田家が世間に一躍名を広めるはづであつた桶狭間の合戦は未遂に终わり、再び長きに渡るにらみ合いが続いていた。

だがその威勢を誇つた今川家は今や滅亡の危機に陥つていた・・・その決定的要因が当主・義元と軍師・太原雪斎の死と松平一族の謀反である、歯止めを失つた今川家は松平家討伐を決意し三河に向かって出兵した。

だが酒井忠次・本多忠勝・榎原康政率いる三河軍団二千と木下藤吉郎・須藤清則・前田利家率いる尾張軍団三千の計五千余の寡兵の前に敗北を喫したのである。

- 鬼馬城 西方 連合軍本陣 -

松平・織田連合軍は吉田城を出立し今川家の牙城・鬼馬城を攻めた、鬼馬城主・朝比奈泰朝はわずかな兵で松平・織田連合軍の猛攻を一週間に渡つてかの城を守り抜いていた。

鬼馬城は搦手門を太平洋側に突き出した堅城で流石の松平・織田連合軍も攻めあぐねていた、一方信長を総大将とした丹羽・柴田・池田（恒興）・佐久間軍団は墨俣へと進撃していた。

すなわち木下藤吉郎を総大将とした前田・浅野・太田・須藤・小一郎軍は三河攻めの全てを取り仕切つていたのだ、だが信長の気性から言うとこのまま無駄に時間を掛け続ければたちまち後方送りにされるのは目に見えていたのだ。

かつて共に敵であった松平元康・木下藤吉郎、須藤清則・本多忠勝は過去の経緯を水に流し同じ戦場で戦つていた。

「『報告致します！！大久保忠世様が負傷なされました！！』

伝令が次々と絶望的報告を本陣にもたらした、大久保忠世は徳川十六神将の一人に数えられる猛将であつたが退却する今川方を深追いしそぎて肩に銃弾を受けたのである。

「何！？忠世が！？・・・解つた、下がつてよい」

元康が忠世の身を案じながらも一軍の大将として氣丈に振舞つた、それを知つてか知らずか藤吉郎が元康に忠世を見舞うよう促したが、この土地に不慣れな織田軍のためにも残らねばならないと頑として受け付けなかつた。

城主・朝比奈泰朝以下城兵は寡兵ながらも奮戦していたものの城内は阿鼻叫喚の地獄絵図が如く凄惨を極めていた、既に兵糧も底を尽きかけていて軍馬や城内の片隅で栽培されていた青々としていた野菜まで喰らい尽くされていた。

当然下々の兵にまで食料が行き渡る訳では無い、中には死んだ同僚の血肉を喰らい生き永らえている者も多數いた、ほかにも鳥や虫をも喰らう有様だから当然の餓鬼地獄であつた。

海に面しているのにも関わらず本拠地・駿府城からは援軍のみならず米の一粒すら到着する気配が無かつた、実は一枚岩に見える今川家でも鬼馬城主・朝比奈泰朝と重臣・岡部元信との間に確執があつたのだ。

かつて義元上洛未遂の折には太原雪斎に説得され共に義元説得を試みた泰朝と上洛を最後まで主張し続けた岡部元信の間には深い溝が横たわっていたのだ。

泰朝は元信に対し詫び状と救援要請の旨が記された書状を送つたが、元信はこれを握り潰し泰朝以下鬼馬城の兵達を見捨てたのである。

打つて変わつて攻め手よりは本多正信・石川数正・木下小一郎が降伏を促す使者として幾度も訪れていたが忠義と現状の間で揺れる泰朝にはイマイチ決め手に掛けていた。

考えに考え抜いた末、一か八かで藤吉郎は清則を降伏勧告の使者として送り込む決断を下した、同じ武人としてこのまま干殺しにされる泰朝を見捨てられないと清則が主張したからである。

「泰朝殿、貴殿等城兵の忠義と奮戦はこの須藤清則のみならず織田・松平両家の武士を感激させる物があり申した・・・降伏は恥ずべきことにござりません・・・何卒このまま無為に戦を続けるのを御止めくだされ」

清則が鎧を纏つたまま降伏勧告の使者として泰朝の説得を開始した、登城途中城のあちこちで見かけた凄惨な光景に思わず涙していたのである。

「・・・・

泰朝は腕を組んだまま黙り込んでしまった、例えここで功績を挙げても氏真の側近である岡部元信に握りつぶされて逆に有らぬ罪で切腹させられる恐れがあつたのだ。

「元康公も貴殿を厚く迎え入れて重く用いてくださる事を約束なさっています、城兵の為・・・しいては貴殿の御為にもこゝは降つた方がよろしいかと」

清則が少し強引な感じに泰朝の心を揺さぶった、清則達は事前に伊賀忍軍・服部半蔵から得た情報で岡部元信と朝比奈泰朝の中が険悪になつてゐるのを知つていた、そしてこの曳馬攻めで泰朝が窮地に陥つてゐる事も。

だが敢えて泰朝を降らせたのは篠吉郎の策謀であった、今川家一の忠義者と呼ばれた朝比奈泰朝が松平・織田軍に降伏したとあらば今川領内の将兵や民の戦意を削ぐのには十分過ぎるである。

「清則殿・・・真に元康殿は某を重く用いてくださるのであるうか

？」

泰朝が清則の顔をじつと見て聞いた、このまま今川家にいても栄達は望めない、ならばいつのこと松平家に仕えて憎き岡部一族を討ち滅ぼし松平家で栄達を手にするのが得策と考えたのである。

「武士に『一言ば』ぢらぬ・・・・信用できぬとあらば、この清則が誓書を書きましょうか？」

清則が確かに手応えを感じて最後の難関を突破しようとした、この悪戯っぽい満面の笑顔と自身に満ちあふれた声に泰朝はついに折れた。

曳馬城陥落と朝比奈泰朝降伏の報告は今川家中を混乱の渦に陥れた、次々と国人衆や水軍衆が今川家に見切りを付けて松平家に鞍替えして行つた。

今川家当主・氏真は北条・武田家に対して援軍を求めたが北条家当主・北条氏康は『墜ちる鳥に差し伸べる手は無き事にて候』と出兵を拒否。

武田からは老兵一百騎と古くなつた兵糧五百石が送られてきた、事実上三国同盟は崩壊し今川家は一人孤立する事となつたのである。

第九話～元康の謀略～（前書き）

評価御願いします

第九話～元康の謀略～

朝比奈康朝降伏に先立ち今まで今川家に対して忠義を尽くしてきた国人衆・水軍衆は相次いで今川家に見切りを付けて松平・織田連合軍に鞍替えし、その先兵として今川家領をジワジワと侵し始めた。

そしてついには今川家最後の城・駿府城（興国寺城は既に武田家の攻撃によって陥落）に籠城して城を枕にして討ち死にする覚悟でいた。

城を攻囲して早三日が経過した、駿府城に立て籠もる今川軍一千による必死の抗戦も虚しく大手門・一の丸共に陥落し残るは本丸のみとなっていた。

だが以外にも本丸の守りは堅くまたもや戦況は膠着状態に陥った、その頃信長は墨俣を包囲するも稻葉山城の軍勢に敗北し小牧山城に引き上げていた、信長は籠吉郎に対して速く今川家を攻め滅ぼし美濃攻めに加わるよう矢のよくな催促を繰り返していた。

そこで籠吉郎は須藤・浅野軍三千一百を残して尾張へと引き上げて行かざるを得なかつた、元康に後事と兵を託し籠吉郎は東海の地を去つていつた。

ある日元康は諸将を呼び集めて軍議を催す事とした、このまま今川攻めが長引けば三河に武田軍が流れ込む恐れがあつたのだ。

「さて・・・諸将等に集まつて貰つたのは他でもない・・・今川家と和議を結ぼうと思つ

「

元康が開口一番に和議と言つて言葉を口にした、篠吉郎からは『決して和議を結ばず今川一族ごとく討つべし』との言葉を貰つて、須藤にとつて意に反する事であった。

「元康殿！！我ら納得する事ができませぬ！！」

須藤と浅野が勢いよく立ち上がりて元康に噛み付いた、自分達がここにいるのは今川家を攻め滅ぼす為であった、のうのうと和議を結ぶ為では無いと続けて言つた、それでも怒り收まらず浅野は本当に和議を結ぶつもりならば我ら織田軍は撤退するとも脅迫したのである。

「須藤殿に浅野殿、まずは落ち着かれよ・・・」

松平軍参謀・石川数正が須藤と浅野に対して着席を促した、数正自身もどこか腑に落ちないがとりあえず話だけでも聞こうと須藤達を説得した。

「これは眞の和議に非ず・・・これは偽りの和議である、かつて北条家の始祖・北条早雲が難攻不落の小田原城を落とした際に用いた策だ」

元康が諸将に解りやすく説明した、つまりは謀略を持つて今川家を討ち滅ぼすと言う訳であった。

その言葉を聞いた須藤達は自分達の非礼を深く詫び謝罪した、その後に元康は諸将達に撤退準備をするように見せかける旨を伝えた。

元康一世一代の大博打は果たして吉とでるか凶とでるか・・・今はまだそれは誰にも解らなかつた・・・。

- 深夜 駿府城 北門 -

和議は成り大方の兵は引き上げていった、だが夜も更け咳払い一つ立てずに城に近づく少數の部隊があつた。

須藤清則・本多忠勝・浅野長吉・酒井忠次・朝比奈泰朝・渡辺守綱・服部半蔵の猛将を含めたたつた十数名の少數精銳特攻部隊である、本隊は高天神城東方十里にて待機し、合図と共に城に攻め込む手はずであつた。

城方は和議が成つたと大喜びで城兵総出で宴に興じていた、まず半蔵と伊賀忍軍数名が音を立てずに城内に侵入し門番と櫓の兵を毒を塗つた棒手裏剣を喉に突き立てて一撃で沈黙させた。

半蔵以下伊賀忍軍は手早く大手門の門を開け忠勝達を中心に招き入れた、忠次と長吉が兵の詰め所に火を放ち肝を潰し逃げ出してきた今川の兵達を忠勝・清則・守綱等猛将が悉く討ち取つた。

その間に半蔵は泰朝の手引きで兵糧庫・火薬庫に火を放ち本丸へ向けて次々と破壊工作を続けていた。

「忠勝殿！！危ない！！」

清則が大太刀で忠勝に斬りかかるとした雜兵を素早く斬り捨てた、三対百あまりの兵力差にも関わらず三人は互いに互いの背中を預ける形で陣を敷いた、例え死合いと言えどもそれは合戦と何ら変わりなかつた。

「清則殿！！かたじけない！！」

忠勝が槍で雜兵の斬撃を受けて礼を述べた、かつては生死の境をのぞき込む様な一騎打ちをした二人だが今は互いに背を預けている・・・この一人の旨に去来する物は何であろうか・・・それは苦々しい私怨では無く戦国に生きる清々しい武人の性であつた。

「すっかり困まれましたなあ・・・」

守綱が少し息を整えて辺りを見た、辺り一面には焼け出された雑兵達が着の身着のままながらも手にそれぞれ得物を持っていた。

渡辺半蔵守綱、松平家に置いて『槍の半蔵』の異名を取った槍の使い手で服部半蔵と併せて『両半蔵』と恐れられた猛将である、この時はまだ松平家に仕えるしがない足軽頭であった。

「どう致す？清則殿・・・」

忠勝が槍の柄を強く握りしめて聞いた、このまま斬り続けても埒があかないのである、それに元康率いる強襲部隊が合図を今か今かと待ちわびていたのである。

「守綱殿・・・俺達が血路を開くから元康殿に合図を・・・」

清則が太刀の柄を握り一息付いて言った、合図は鏑矢を勢いよく上に打ち上げるだけであつたが、その隙が防戦一方の清則達には見つけられなかつたのである。

「そんな・・・俺はまだ戦えます！！」

守綱が思わぬ事を言われて面食らつたが即座に反論した、もしもに備えて一人一本の鏑矢を所持していたのである。

「その傷では満足に戦えまい・・・ここは清則殿の言つどおりにす るんだ！！」

忠勝がちらりと守綱の肩の傷を見て怒鳴つた、戦いの最中守綱は肩に怪我を負つたのである、他の一人は満足に手傷すら負つていなかつた。

「行くぞ！忠勝殿！！走れ、守綱殿！！」

清則が思いつきり駆けだして敵に斬り込んで行つた、それと同時に忠勝も槍を振り回して敵に突っ込んでいった、思わぬ反撃を受けた雑兵達は動搖して守綱を追う事が出来なかつた。

「ええい！！構うな！！奴らの首を上げよ！！」

足軽頭らしき男が動搖する兵達に命令を下した、だが戦国最強と呼ばれた一人の勢いは止まらなく次々に討たれて散つていつた。

二人の活躍もあり守綱は櫓の上から鏑矢を射た、鳥の鳴き声に似た音が闇夜を切り裂くように鳴り響いた、この音を聞いた元康軍本隊は怒濤の勢いで馬を駆けさせて駿府城を強襲した。

第九話～元康の謀略～（後書き）

作者のどうでもいい日記

今日、TBSサイトで注文した最終話収録某RM第一期DVDが到着。

だけど・・・何回見ても軽く鬱になるなこれ・・・

第三期放送をわくわくして待っている俺は阿呆なのか・・・それとも薔薇しんすこりや

第十話～今川家の最後～（前書き）

今日はがんばって一話投稿してみました。

火の手が上がった事に気が付いた清則・忠勝・泰朝の三人は群がる敵を薙ぎ倒して本丸御殿に突入した。

炎の中では既に氏真は自害して果てていた、だがその傍らでは静かに佇む鎧武者の姿があつた、岡部元信その人であつた。

「裏切り者め・・・ようやく来たか」

元信が鞘から太刀を抜き払い鞘をそのまま炎の中に投げ込んで呴いた、その目は憎しみをありありと映していた、泰朝は清則が止めるのも聞かずに静かに元信の前に立ちはだかつた。

「元信・・・お前は道を誤つた、御館様を支えねばならなかつた我らがこうして憎しみ合わねばならぬ事はワシは我慢できなんだ・・・」

泰朝が太刀を抜いて元信に切つ先を突きつけて呻くような声を上げて元信を静かに睨み付けた、この一人の間に清則もそして忠勝ですら割つてはいる事は出来なかつた。

「おい・・・そこの人、この死合いの検分役・・・頼めるか？」

元信が切つ先を忠勝と清則に向けて頼みこんだ、二人はただ黙つて頷くしか無かつた、あちこちで火災による崩落が起こり危険な状況であつたが何故か彼らの周りにまで危険がおよぶ事は無かつた。

泰朝・元信ともに同時に斬りかかり刃がぶつかり合つ度に火花が飛び散つた、炎の中で行われる一騎打ちに清則と忠勝は身震いするような美しさを感じた、それは武人にとって最高の舞台とも言えた、

一人にはもはや己の息づかい以外何も聞こえない武の聖域を感じ取つていた。

何十合と打ち合つたにも関わらずまだ勝者が決まらなかつた、互いに息が上がり最後の渾身の一撃をすれ違いざまに放つた、清則と忠勝は生唾を飲みどちらが先に倒れるのかと目を見開いてじつと凝らしていた。

「ぐつ・・・・」

先に膝を突いたのは泰朝であつた、鉄掠えの鎧の胸の部分が切り裂かれて鮮血が迸つていた、だがその直後元信が剣を地面に落とし力ツーンと寂しい音が鳴り響いた。

「や、泰朝・・・・」

元信が崩れ落ちるように倒れながら呻いた、泰朝の一撃は元信の胸を深く切り裂いていたのである、結局それが致命傷となり元信はそのまま落命した、最後の瞬間彼が見たのはもしかして義元に召し抱えられて好敵手・泰朝と功を競い合つた懐かしい日々だつたのかも知れない、だがそれを知る術は三人には無く、元信も物言わぬ骸と化していた。

「清則殿・・・これを持つて行ってくだされ宗近三日月でござる」
泰朝が氏真の近くに転がつて今川家の名刀・宗近三日月を震える手で清則に手渡した、いわばこれが氏真の首の代わりと言つ訳であつた。

「し、しかし・・・・」

清則が慌てるのも無理がなかつた、既に火の手は三人をすっかり取り囲んでいたのだ、このままでは三人とも焼け死ぬだけであつた。

「心配無用・・・」ここから外に出られる・・・さあ・・・」

泰朝が体を引きずつて掛け軸の裏に付いていた取つ手を引っ張つた、そこには城外に通じる秘密の抜け道へと続く階段があつた、幸いそこにはまだ火の手も煙も回つていなかつた。

「泰朝殿は・・・!?

忠勝と清則が階段を下りようとした瞬間、辺りが突然暗闇に包まれた後ろを振り返ると天守御殿へと通じる戸が堅く閉ざされていた。

「つ！泰朝殿！」「

清則が戸に体当たりしても戸はビクともしなかつた、もう一度体当たりを試みたが忠勝の手が清則の腕を掴んだ、忠勝は無言で頭を振つてあきらめる様に促した忠勝はうつすらと目に涙を浮かべていた、清則は静かに俯き無言で涙を流した、だが泣いてばかりはいられないと言わんばかりに手の甲で涙二人は薄暗い階段を駆け下りて外へと田指した。

「義元様・・・氏真様・・・清則殿・・・元信・・・」

紅蓮の炎が辺りを包み込む中、泰朝は戸にもたれて自分の最後を悟つた、もう立つ事も自害する事も叶わぬほどに出血が酷くそのまま泰朝は深く目を瞑りうつすらと笑みを浮かべたまま一度と目を開ける事は無かつた。

最後の瞬間泰朝の脳裏には若き頃に大志を自分と元信に語つてくれた今川義元と今川氏真、閑職に送られた自分にもう一度活躍する場を与え最高の舞台を見届けてくれた須藤清則。

そして・・・共に戦場を駆けめぐり、共に功を競い合つた同僚・岡部元信の姿が鮮明に写つた、互いに道を違えども最後は一騎打ちの内で意思疎通できた事を嬉しく思つた・・・だがそれを知る者もまた元信の時と同じく誰もいなかつた。

やがて炎は元信・氏真・泰朝の骸を優しく包み込み本丸全体をも包み込んでいた・・・。

城外に出た一人は闇夜の空に舞い上がる火の粉をまるで三人の魂が浄土に向かつて舞い上がりいくかの様な幻想的な場面をしかと目に焼き付けた。

武人にとって最高の舞台を見れた事による感謝と三人の靈を慰めるかの様に一人は静かに手を合わせてその場を後にした・・・。

今川氏輝・今川義元・今川氏真と三代に渡つて勢力を拡大し続けた今川家はここに滅び去った、皮肉にも今川家の滅亡により戦国の世は益々混沌とした時代へと向かいつつある事をまだ誰も知らなかつた・・・。

第十話～今川家の最後～（後書き）

武士としての本望とは一体何なんでしょう・・・。
やはりこの平和な時代に生き平和を貪る俺達には絶対解らないな
でしょか・・・。

でも確かに事は・・・彼らの粗々しくも美しい血は我々現代人の血
にも流れているのは確かでしょう・・・。

第十一話 平和な日常

- 一週間後 小牧山城 大広間 -

須藤は今川攻めを終えて残留組を伴い尾張に凱旋、そして織田家にとつて強大な敵であつた今川家を滅ぼしたその実力は既に織田家でも一目置かれるようになつていて。

ある日清洲にて療養していた須藤の元に小牧山にて美濃攻めの指揮を執つていた信長から突然招集が掛かり須藤は急ぎ小牧山城へと登城し信長に謁見した・・・。

「清則・・・改めて先の今川攻め見事であつた・・・」

信長が普段と変わらぬ険しい表情で目の前に鎮座している須藤を睨みつつ聞いた、だが須藤は信長が怒つてはいない事は解つていた、どこか涼やかな風が信長の心に吹き荒れている気がしていたのだ。

「はっ！！籠吉郎様が美濃攻めに加わると聞き、未熟者ながらも指揮官の大役を仰せつかりました！！」

須藤が頭を下げて信長に上奏した、事実須藤は今川攻めにおいては功績第一であつたが生来主君を立てる謙虚さを持ち合わせていて、凱旋後も昇進や加禄の話が持ち出されたが全て丁重に断つていた。代わりに籠吉郎の昇進を嘆願した程の忠義者で信長をして『猿には過ぎたる者』と褒め称えられた程であった。

「して・・・お主は松平元康なる人物をどう見る？思つまま述べてみよ」

信長が突然話題を変えて須藤に問いかけた、今川家は滅び去つたが

代わりにもつと強大な敵になりうる男が現れたのを気に掛けていたのである、そしてその男の元で今川攻めに参加し最も近くにいた須藤を呼びつけたのである。

「・・・恐れながら申し奉ります、松平元康なる人物は軍略や知略に長けているだけではなく本多忠勝・酒井忠次等の名将からも慕われ領民からも敬われております・・・正直に申しますと某はかの男と戦うのは避けた方がよろしいかと存じます」

須藤が元康に従ってきた半月で見た事全てを信長に報告した、いかに信長と言えども元康と正面を切つて衝突すれば負けはせぬが代わりに大打撃を被る事は分かり切っていたのだ、故に戦うのでは無く同盟を結び強力な味方にすれば万事滞りなく進む事を進言した。

「お主ほどの漢がそこまで言うのであらば事実であろう・・・」
信長が腕組をしてボソリと呟いた、既に信長は須藤に対して藤吉郎たち重臣と同じく絶大な信頼を置いていたのだ、信長はそのまま黙つて頷くと長秀をジロッと見た。

「はっ・・・

長秀がスッと頭を下げて前に一步進み出た、長い間信長に仕えている重臣達は信長の目線を感じた場合は即座に動ける体勢を取るのが常識であった。

「長秀、松平家との同盟交渉の全てを任せると・・・須藤、『ご苦労であつた・・・引き続き猿の元で励めい』

信長が長秀と須藤にそう命じた後スクッと立ち上がつてそのまま奥へと下がつて行つた、信長が須藤の進言を聞き入れたのである。それは須藤が押しも押されもせぬ織田家の重臣としての地位を確立した瞬間であつた、だがそれを快く思わない者がいた。

「ちつ・・・成り上がり風情が調子に乗りおつて・・・」

織田家侍大将・滝川一益である、伊賀の出身で伊賀忍術を極めた忍武将として織田家でメキメキと頭角を現していたのである。

彼は自分が一番信長に信頼されていると思いこみ自然と須藤に対して敵対心を抱いていたのである、無論一益から発せられる険悪な空気を須藤も読んでいて互いに口も聞こうともしなかつたのである。

- 木下隊 野営地 -

須藤は城から出るとその足で簾吉郎の元を訪れた、この時簾吉郎は木曽川に住む古くからのつき合いである野武士集団・川並衆を諜略し蜂須賀小六を配下に迎えていたのだ。

「おい、そこの兄ちゃん・・・あんた強そうだねえ、どうだい？俺と手合わせしねえか？」

薄汚くボロボロになつた鎧を着た青年が突然須藤の前に立ちはだかつてニヤニヤ笑い始めた、須藤も直感でこの男がただ者じゃない事を悟つた。

「・・・いいでしょう・・・」

須藤が小太刀の柄に手を掛けてキッとその青年を睨み付けた、だがその青年はニヤニヤ笑うばかりで一向に打ち込んでくる気配を感じなかつた、どんなに須藤が鬪気を叩き付けても全く反応を見せないのである。

痺れを切らした須藤が勢いよく刀を払うとその青年も同時に刀を払つた、火花が散つた次の瞬間両者の刀は真つ二つに折れていた。

「小六っあん・・・幾らあんたでも無理だよ・・・良くなつてきたな清則・・・」

騒ぎを聞きつけた籠吉郎が陣幕を捲つて青年に声を掛けた、そう彼

こそが蜂須賀党の頭であり川並衆の長・蜂須賀小六であつた。

蜂須賀小六正勝、秀吉の霸業を支え続けた名将で墨俣築城の折りに秀吉に仕え秀吉の天下統一が成るとその功績から四国を与えられても直ぐに家督を嫡男・家政に譲つて隠居したのである、ちなみにこの男は武勇だけでなく知略に長けてもいて秀吉に仕えた最初の参謀と言つても過言では無かつた。

「籠吉郎様、ただいま戻りました・・・」

須藤がスッと折れた小太刀を鞘に戻して籠吉郎に向けて頭を深く下げた、籠吉郎は須藤の肩をポンポンと叩いて労つた、須藤にとつてこれが何よりの褒美と言つても過言では無く、どこかくすぐつたいような気持ちになつた。

「清則？・・・あんたもしかして・・・あの須藤清則かい？」

小六がちょっと驚いて須藤に聞いた、その顔は親にしかられている子供みたいなどこか情けない顔をしていた、その顔に思わず須藤は苦笑いを浮かべてしまつた。

「如何にも・・・某が須藤清右衛門清則です」

須藤がそう言つて頷いた、それを聞くや否や小六は小さく悲鳴を上げて一步下がつた、そしてマジマジと清則の顔を見てどこか安堵の息をついた。

「失礼しました、俺は蜂須賀小六正勝と申します・・・お目に掛かれて光栄です・・・それにしても噂と違つて聰明な顔立ちをしておられる」

小六が即座に自分の失礼を詫びてケラケラと笑つた、一体どんな噂が流れてるんだよ・・・と須藤は少しあきれかえつた。

「はあ？ どんな噂が流れてるんですか？ 小六殿？」

籠吉郎の後ろから現れた小一郎が空気を読まずに聞いた、そう聞かれでは断る訳にも行かず小六は渋々口を開き始めた。

「かの男、口は耳まで裂けて体重は百貫を超え・・・合戦の折りには敵味方の死体に食らいつき食えと乾きを癒し、その豪腕で大岩をも軽々と持ち上げて敵に向けて投げつけると・・・」

小六が気まずい雰囲気の中でボソボソと答えた、その現実離れした答えに思わず全員が噴き出してしまった。

第十一話～竹中半兵衛重治 前編～（前書き）

今回のお話は太公望や諸葛亮ネタが若干混じつてあります・・・（
解る人には直ぐ解りますね）

後 Wikipediaを参照した事をJIRで報告させて貰います

第十一話 竹中半兵衛重治 前編

- 墨俣城 -

武神・須藤清則が加わった篠吉郎軍はおよそ三割の死傷者を出したながらも墨俣城を奪取し、この地に兵糧や武器弾薬を運び込んでいた。ちなみにこの墨俣城は美濃防衛と尾張進攻を兼ねた戦略的要所で美濃随一の知将・竹中半兵衛重治が築城案に賛同する諸将と結託して自費で築城したと言うのである。

正面より須藤軍がそしてその側面を突くように小六率いる川並衆の筏部隊が突き激闘の末に落城したのである、この合戦で織田家は美濃進攻への重要な橋頭堡を得たのである。

墨俣落城を聞いた信長は大喜びで直ぐに全軍を率いて北上を開始した、それと入れ違いに篠吉郎・小一郎・須藤は城を出て美濃三人衆（安藤・稻葉・氏家）と竹中半兵衛の謀略の準備に入つた。

斎藤家当主・斎藤龍興は祖父・斎藤道三や父・斎藤義龍の一族とは思えぬほど愚鈍な男で昼間から酒色に溺れて重臣達の意見など採り入れず自分を褒め称える様な甘言家達を側近として仕えさせる等と乱雑な政治を行つているせいか、次第に家臣達の心が離れていつてしまつっていたのだ。

そんな龍興を諫める為に軍師・竹中半兵衛は親族の者である安藤守就と共に謀してわずか十数名の兵を率いて稻葉山城を奇襲しこれを奪つたのである、半兵衛は直ぐに城を龍興に返上して隠遁したものの

龍興とその家臣の間に不穏な空気が漂っていたのは言つまでも無い。

「竹中半兵衛さえ味方に引き込めばその親族である安藤守就を初めて稲葉一鉄・氏家ト全を謀略するのは容易い・・・が前田殿ですら無理だつた御仁じや・・・容易くは行かないもんじや」

簾吉郎が斎藤家の主立つた家臣達の名が記された紙を扇子でペシペシと叩いて説明した、その日は連戦に次ぐ連戦で疲れ切っていた、無論清則も先の合戦で怪我をしていましたが無理をして軍議に出席していた。

「いや、本当にあの時は面目無かつた・・・」

普段から陽気な利家が珍しく意氣沈静に詫びを入れた、利家は半兵衛謀略の為に半兵衛の娘・千里と懇意の中になり彼女を介して半兵衛に謀略の手を伸ばしたが半兵衛はそれを知らぬ顔をして千里に命じて逆に織田軍の戦力などを聞き出し、第一次墨俣合戦において織田軍敗北の要因を作つたのである。

ちなみにこれが後に「知らぬ顔の半兵衛」と言ひ諺になつたのである。

「その御仁・・・是非とも軍師に欲しい逸材ですな」

清則がふと思いついたかの様に簾吉郎に進言した、不幸にも簾吉郎軍には浅野長吉・木下小一郎の名だたる文官を抱えていたがいざれも軍師とは呼べない代物である、また清則・小六自身も度々簾吉郎に進言する事はあるがせいぜい参謀格程度である。

「軍師か・・・それは思つてもみなかつたわい・・・」

簾吉郎が少しこまめな声を出してボソリと呟いた、小一郎も納得がいったのかうむうむと首を縦に振つた。

清則は簾吉郎の命を受けて半兵衛が隠居している栗原山中の庵を訪れた、門前で掃除中の半兵衛の娘・千里を見つけ声をかけた。

「あの・・・竹中半兵衛様はご在宅でしょうか?」

清則が千里に声を掛けた、千里の方は突然現れた武士に警戒心を見せて持っていた箒をギュッと握りしめて身構えていた、正直清則は声を掛けるべきか迷つたあまりにも千里が周りの風景に溶け込む程美しかつたのである。

「は、はい・・・どちら様でしょうか?」

千里がおどおどして聞いた、かつては友人と思つていた利家に裏切られた心傷故で人間不信に陥り掛けていたのである。

「あ、これは失礼致した・・・某は織田家足輕大将・須藤清右衛門清則と申します」

清則が笠を取つて自己紹介した、それを聞いた途端に千里は目の色を変えた、その色は憤怒のような深い悲しみの色であった。

「お帰りください!!織田家の人間には父上はお会いになりません!!」

半ばヒステリーに叫んで箒を抱えたまま門の内に叫び勢いよく門をバタンと閉めて鍵を掛けてしまった。

(やれやれ・・・一筋縄にはいかんのう・・・全くを持つて前途多難じやのう・・・)

清則が庵へ続く石段を下りながら一人先が思いやられると珍しく弱気に思った。

その晩清則は簾吉郎に対して半兵衛諜略に時間が掛かる旨を記した書簡を送っている、それから一口間通り詰めたが門前払いを食らうばかりで一向に竹中半兵衛なる御仁の顔すら拝めずにいた。

既に簾吉郎から貰つた旅費も尽きた為に仕方なく門前で石段を枕にして一晩を過ごす事にした、だがこの決断が思わぬ奇跡を呼ぶ事になつた。

目が覚めた清則はまた千里に声を掛けたがやはり門前払いを食らつてしまつた、困り果てた清則だがあきらめる訳には行かず近くの川で魚を釣り朝食を取ろうとした、だがそこには既に先客とおぼしき青年が一人糸を垂らしていた。

「おや？ 御武家様、このような所で釣りですか？」

青年が清則を見かけて声を掛けた、その顔は青白く見るからにどこぞの過保護な親に育てられた若旦那風であった。

「ええ・・・腹が減つてはなんとやらと申しますのね」

清則がその青年の隣に腰を下ろして釣り糸を垂らし始めた、暫く糸を垂らしているとふと青年がまた声を掛けってきた。

「はて？ 御武家様はどこの大名家にお仕えしておられるので？」

青年が不思議そうな顔をして清則に聞いてきた、清則も釣れぬ苛立ちと空腹を紛らわす為に青年の問いかけに答えようと思つた。

「織田家の部将・木下簾吉郎様にお仕えしております・・・」

清則が少し顔を崩して答えた、郷に入つては何とやらで本意を持つて人と接する様に心得ていたのである。

「ほお、木下簾吉郎様・・・その木下様なる御仁は如何なる人で？」織田家と聞いた時若干青年が動搖したかに見えた、だが清則は武家と接する事で多少緊張しているのだなと勘違いした。

「素晴らしいお人ですよ木下様は・・・俺は元々家柄も無いしがない足軽でしたが木下様や信長様に認められて足軽大将にまでして頂きました・・・」

清則が嬉しそうに簾吉郎の事を話し出した、鳴海での合戦の事や今川攻めで総大将に任命された事も全て破顔の表情で話した、青年は時折相づちを打つて色々と質問してきた。

「して・・・この様な所にはなんの御用で？お忍びでいらっしゃる所をお見受け致すと斎藤家か浅井家への間諜ですか？」

青年が釣つた魚を魚籠に入れながら聞いた、清則はその問い合わせに答えるべきか否かを迷つたがこの青年に気を許していたのか思わず喋つてしまつた。

「竹中半兵衛重治殿を簾吉郎様の軍師としてお迎えに参つた次第です・・・あのお方ほどの知患者が軍師となつていただければと思うと・・・」

清則がまるで自分の事の様に半兵衛の事を褒め称えた、稻葉山乗つ取りや知らぬ顔半兵衛の事全てを話し始めた。

そういうしている間に日はすっかり昇り正午を過ぎていた、釣果は田も当てられぬ程のぼつづであった。

「御武家様・・・どうですか？我が家で昼食など・・・」

青年がポンポンと自分の満杯になつた魚籠を叩いて昼食に誘つた、何も釣れず山中に入つて山菜やキノコを探つて食べようか迷つていた清則に取つてはまさに助け船であった。

「かたじけない・・・」相伴にあずからせて頂きます」

清則が心から感謝の言葉を述べた、青年の住む家への道中どこかで見た場所を何度も見た、そして青年に案内されたのは・・・。

「二二〇が我が家です・・・家と言つても見窄らしい庵で御座います
が」

青年が案内したのは何と四日連続で訪れていた竹中半兵衛が住む屋敷であつた、清則は思わず神に感謝する様に心中で踊り狂つた。

「もしや・・・あなた様は竹中半兵衛様で?」

清則が一応確認の為青年に問いかけた、青年は二二〇りと笑つて首を縦に振つた。

「如何にも・・・私が竹中半兵衛重治で御座います」

清則はこの言葉に一筋の光明を見いだした気がした・・・。

第十一話～竹中半兵衛重治 前編～（後書き）

さて前書きと異なつて作者の本音を申し上げますと・・・。

誰でもいいから評価していくべきでない、貶しても良いですから・・・

第十三話～竹中半兵衛重治 中編～（前書き）

PCにウイルスが入った為に投稿が遅れた事をここにお詫びします

第十二話 竹中半兵衛重治 中編

- 栗山庵門前 -

「さ、貴殿が御高名な竹中半兵衛重治様……これは知らずとは言えご無礼を……」

須藤が慌ててその場に平伏して先までの非礼を詫びた、下手をすれば仕官どこの話では済まないと即座に判断したのである。

「そのような……御着物が汚れてしまいますが、それに名乗りもしなかつたこちらが悪いのです……どうかお気に召しますな」逆に半兵衛の方が慌てて須藤の手を取つて言つた、半兵衛は自らの手で清則の袴の裾に付いた埃と泥をほろつてやつた。

「そ、某は木下簾吉郎様麾下の須藤清右衛門清則と申します……なにとぞ半兵衛様のお力をお借りしたく……」

清則が半兵衛の手を握りしめて何度も懇願した、半兵衛はその名を聞くとピクッと勘付いた、須藤清則と言えばかの本多忠勝と互角に渡り合い今川攻めで功を上げ今や織田家でも一、二を争う猛将であると悟つた。

「須藤殿……まずは昼食になさいましょう、仕官の話はそれからと言つ事で……」

半兵衛が須藤の手を引いて庵の中に入つた、門の中では千里が唖然とした顔でこちらを見ていた、あれ程嫌がつていた織田家人間を中に入れたのは利家以来の事であつたのだ。

- 庵 大広間 -

清則は田の前に出された山菜や魚で彩られた膳をあつといつ間に平らげてしまった、いや正確には味など感じなかつた、かの名参謀・竹中半兵衛といつして食事が出来る事に箸を持つ手が震えてしまつたのだ。

「父上様・・・安藤守就様がお越しになられましたが・・・」

千里がスッと襖を開けて半兵衛の叔父である安藤守就の来訪を告げた、清則は拙いと思い動搖して箸をコトトリと落としてしまつた、それに感付いた半兵衛がチラツと清則を見た。

「清則殿・・・貴殿は織田家のの人間、斎藤家のの人間と鉢合わせするのは氣拙いでしょう・・・書斎でお待ち頂けますか?千里、案内してあげなさい」

半兵衛が静かに箸を置いて清則に退席を促した、清則は地獄に仏と言つ感じで慌てて千里の後を付いて大広間から出て行つた。

「須藤様と申しましたね?」

千里が初めて温厚に語りかけた、清則は驚いて千里の方を見た、いつもは半ば発狂したように叫ぶ千里が初めて女らしい口調に戻つたのである。

「は、はい・・・」

須藤が埃つぽい書斎の床にゆっくり腰掛け返事をした、辺りを見渡せば孫子や春秋左氏伝などの政治書や兵法書が山積みになつた。

「あ・・・いえ、どうぞ」ゆつくり・・・

千里が含みのある言葉を残して部屋の戸をパタリと閉じて行つた、変だなと思つたつきり清則は山積みになつてゐる書物から『墨子』

なる兵法書を取り出して読みふけり始めた。

呉子が読み終わると孫子・戦国策・蔚僚子・三略と次々に本を取つ替え引っ替えに取り出しては水に濡れた大地みたいに貪欲に吸収して行つた。

そして三略を読み終えて同馬法へと手を伸ばそうとした時に辺りが暗くなり始めている事に気が付いた、しもうたと思い立ち上がり後ろを振り返ると既に半兵衛がそこに座つて御茶をのんびりと啜つていた。

「あ、あの・・・」

須藤が顔面蒼白になつて頭の中が真つ白になつた、こんなにも半兵衛を待たせた挙げ句自分は暢気に読書に耽つていた等とども仕官の誘いにきた使者に有らざる行為に田の前が真つ白になつた。

「いえいえ、書物とは所詮は読んで貰つて初めて存在意義が有る物です・・・」

半兵衛が二コリと笑つて湯飲みをコトンと置いた、その言葉に救われたかの様に須藤はホッと溜息を付いて床に座つた。

「叔父上は大変現在の斎藤家の状況を憂いておいででした・・・家中では疑心暗鬼が支配し、軍は統率が取れずに略奪や脱走がまかり通りつております・・・挙げ句には民ですら税を納めず逃亡したり棄民になつて織田家へと逃げております」

半兵衛が困り切つた顔をしてポツリと愚痴をこぼした、現に安藤守就も既に斎藤家を見限り始めていとさえこぼした。

「国の不和・軍の不和・部隊の不和・戦闘の不和ですか？」

須藤が即座に先ほどから吸収した知識を思い切つて半兵衛にぶつけ

てみた、半兵衛は左様と言わんばかりに頷いた。

「変わつて織田家では賞罰を公正に行い軍紀を乱す者は例え功績があつても厳重に処罰されるとお聞きします」

半兵衛が湯飲みに茶を注いで須藤に手渡した、須藤はそれを受け取ると静かに啜り始めた。

「左様、かつて今川攻めに置いて功績を挙げた小姓が此度の墨俣攻めでは敵前逃亡をする始末でした・・・それを知つた大殿は即座にその小姓を御斬りになられました・・・」

須藤が先の墨俣の合戦で起こつた出来事を話した、先の曳馬攻めで奇襲部隊を獅子奮迅の働きで撃退した勇猛な小姓がいて信長は小姓の身から足軽頭に抜擢して手元に置いたが・・・墨俣攻めの折りには十名もの兵の頭にありながら敵の猛反撃を受けるや否や兵を置き去りにして本陣に逃げ帰ってきたのだ。

それを知つた信長は『例え十名の足軽と言えども兵を置き去りにして敵に背を向けて逃亡するとは何事か』と激怒してわざわざ本陣まで訪れ『清則を見よ！』かつて彼が足軽頭であつたときは犬千代（利家）を救うために鬼とも思える本多平八と対峙し互角に戦つたのだぞ！』とその小姓を叱責した上で自ら軍令違反の罪でその小姓を斬り捨てたのである、この厳罰を恐れた兵達は誰一人として逃げ出さずに墨俣の地を枕に討ち死にしたのである。

「成る程・・・信長様は龍興様と違つて聰明な御方でいらっしゃますな・・・」

半兵衛が腕を組んでウーンと唸つた、この時明らかに半兵衛は織田家に仕官すべきかどうか迷い始めていた・・・。

第十四話～竹中半兵衛重治 後編～（前書き）

PCにウイルスが入つてたせいかデータが全部パーになり投稿が遅れました。

いえ、決して言い訳ではありません・・・。

嘘です・・・言い訳です

第十四話／竹中半兵衛重治 後編

- 翌朝庵書斎 -

結局須藤と半兵衛は朝まで兵法や戦国時代を終わらせるには?などの討議を続けていた。

須藤はこの漢にいつの間にか惚れ込んでいた、この漢ならばきっと簾吉郎様や信長様を天下人してくれるはずだという絶対な自信を持ち始めていた。

また逆に半兵衛も須藤の柔軟性や理解力を評価しその無限大の可能性に興味を引かれていた、そしてそんな彼が心底尊敬している木下藤吉郎なる人物にも興味を抱き始めた。

半兵衛は須藤が帰った後も一人書斎に籠り考え続けていた、織田家につくかそれともこのまま素浪人のまま人生を終えるか・・・。

半兵衛は肺を病んでいて自分でもそう長くは生きられないであろうと感じていた、ならばこの命燃やし尽きる日が来るまで木下藤吉郎を主として戴き決して悔いの無い人生を送ろうと決心した。

「千里はあるか!!」

半兵衛が勢いよく襖を開け放ち庵中に響くような大声を上げた、まだ寝ぼけ眼であつた千里もこの声に肝を冷やして直ぐに書斎に駆けつけた。

「いいに・・・」

千里が父の前に跪き返答した、千里は思わず声を上げて驚きそうになつた須藤が訪れるまで暗く今にも死相が出そうな顔をした半兵衛の顔が何と生氣に満ち溢れ目が輝いていたのだ。

「こゝを払うぞ！！」

半兵衛が袖口に手を突つ込みガハハと大声を上げて笑い始めた、千里にとつてこんなに嬉しそうな父の顔を見るのは初めてであつた、実は既にこの時半兵衛の頭の中では長年の隠遁生活で鍛付いた脳がフルスピードで回転し始めていたのだ。

「え？・・・

千里が思わず戸惑つた、彼女にとつてこの地は故郷同然でほかの土地に移り住むとは思いもしなかつたのである。

「藤吉郎様の元へ参るぞ！！我が知略を欲する者のためにワシは行き続けねばならんわ！！」これから忙しゅうなるわい！！

半兵衛が薄ら笑いを浮かべて嬉しそうに答えた、半兵衛は織田家へ仕官を決めこの庵を出て広い世界で自分の頭脳をフル活用しようと悟つたのである。

- 墨俣城 大広間 -

半兵衛は須藤に連れられて信長に謁見するため織田軍の美濃攻略の要所・墨俣城を訪れた。

須藤は無事に仕事をやり遂げたと言わんばかりに藤吉郎に半兵衛の凄さを何度も繰り返して報告した。

藤吉郎に至つては『我が（漢の名軍師・張良）子房が來た』と三國志に置ける魏の曹操が名軍師・荀？が仕官しに來た故事に準えて最

大限の歓迎の言葉を述べた。

墨俣に到着して一時間もしない内に信長から大広間に来るよう指示が与えられた。

「つぬが竹中半兵衛重治か？」

信長が上機嫌に聞いた、須藤不在の間に散々西美濃三人衆（安藤守就・氏家ト全・稻葉一鉄）に煮え湯を飲まされ続けていたのである。半兵衛が織田陣営に下つたとなれば美濃勢の将兵は動搖し疑心暗鬼が生まれて如何に堅牢な稻葉山城と言えども打ち碎くのは赤子の手を捻るようなものであつたのだ。

さらには安藤守就を筆頭として西美濃三人衆の調略も容易いものになると踏んでいたのだ。

「はつ・・・竹中半兵衛重治にござります」

半兵衛が都の貴人から薰陶を受けた古今の教養を学んだ文化人の名に恥じぬような涼やかな態度で返事をした。

「つむ……よい顔じや……ワシに仕えよ……」

信長が扇子を半兵衛に向けて自分に仕えるよう命じた、だがその言葉を聴いた瞬間半兵衛は即座に顔を曇らせた。

「恐れながら申し上げます・・・私は既に仕えるべき主を見つけております故、その儀はお断りさせていただきます」

半兵衛が信長からの誘いを丁重に辞退した、半兵衛は藤吉郎に仕えるのであって信長に仕える訳では無いとはつきり豪語したのである。

「むう・・・どうしても猿めに仕えると申すのか？」

信長が少し機嫌を悪くして呟いた、その場に居合わせた家臣達もどこか青ざめた表情をしている藤吉郎に視線を向けていた。

「はい、例え百万石の高祿でと言われても私の決意は変わりませぬ。
・・・」

半兵衛が正面から信長と戦う姿勢をアリアリと見せ付けた、このやり取りをまじかで聞いている藤吉郎と須藤は冷や汗ものであった。

「ふつ・・・よからう、猿の家臣は我が家臣も同様じゃ……猿の元で励めい！！」

信長が諦めたのかそう叫ぶと口口と寝転がつて天井を見上げた。

「ありがとうございます・・・ではこれで、即座に西美濃三人衆の調略の準備に取り掛かります」

半兵衛がスッと頭を下げると藤吉郎等と共に大広間を後にして行った。

この謁見の後に半兵衛を批判する者も少なくなく（滝川一益・佐々成政・柴田勝家等）即座に信長に対してもこれと換言した。

「猿には勿体無い者がある・・・須藤清則の武に竹中半兵衛の知の一つじや」

信長がクスクスと笑つて信玄が家康に対しても『家康に過ぎたるは唐の頭に平ハ』と言つたように藤吉郎を高く評価した。

半兵衛参陣によって織田軍はもはや美濃での合戦で非常に優位に立つことが出来た。

ちなみに今回の美濃遠征に参戦している諸将は次の通りである。

織田軍文官衆（丹羽長秀・木下藤吉郎・佐久間信盛・林秀貞・森可成）

織田軍武官衆（柴田勝家・池田恒興・須藤清則・滝川一益・佐々成

政・前田利家(

そして木下軍団では軍師・竹中半兵衛を新たに迎え。

文官(木下小一郎・浅野長吉・竹中半兵衛)

武官(須藤清則・蜂須賀正勝・前田利家・太田牛一)

と織田家でも一、二を争うような面子が揃っていた・・・。

おまけにこの美濃攻めで新たに数名の知将・猛将が木下軍に馳せ参じる事となるのである・・・。

第十四話～竹中半兵衛重治 後編～（後書き）

評価ありがとうございます！…まだまだ未熟者に毛が生えた程度ですがこれからも日々精進していきます！

第十五話～稻葉山の出合～（前書き）

PC調子悪い……。〇ーＺ……。
BFも途中でブリックアウトある……。

第十五話 稲葉山の出会い

半兵衛が木下軍に仕官してから三日が過ぎた。

半兵衛の言葉は正に傾国の美に等しく叔父・安藤守就や稻葉一鉄・氏家ト全などの西美濃三人衆も織田家に内応し恭順する姿勢を見せていた。

他にも美濃の土豪にも木下軍の傘下に入るよう書状を休む間も無く書き続け、山内一豊・中村一氏・前野長康等の諸将が相次いで木下軍に下り即戦力となつた。

打つて変わつて木下軍を影で支え続けていた浅野長吉・木下小一郎などの文官にとつて台所整理や禄高調整に追われる日々となつた。

そして半兵衛仕官から丁度一ヶ月が経過した時藤吉郎以下織田家重臣達に非常呼集が掛かつた。

恐らく美濃攻めの事前会議であろうと誰もが予測できた、と言つのも留守役を続けていた織田信益・織田信成などの織田一門衆や三河の徳川援軍が続々と墨俣入りしていたのである。

この時織田軍は三万六千に対して斎藤方はわずか一万弱と言つ圧倒的大差をつけておりその陣立てを見た各地の諸侯は『信長恐るべし』と口々につぶやいたと云つ。

対する斎藤方は各地の支城を捨てて稻葉山城に籠城し徹底抗戦の姿勢を見せ続けていた。

だがそんな状況下でも斎藤家を見捨てずにただ忠義を尽くす者も少くなかつた、長井道利等の武将達である。

彼等は稻葉山城に立て籠もり日夜織田家の猛攻を防いでいた、だが長井道利以外にも斎藤家を支えていた名将がいた。

中条流剣術伝承者・富田勢源であつた、あまり知られてないが彼は一時期斎藤家剣術指南役として使えていたが義龍死後野に下つていたのだ。

彼は剣術だけでなく兵法にも明るく、それを見初めた龍興に召し抱えられていたのだ、彼は籠城に先立ち病で盲目になりながらも完璧に等しい指揮で織田軍を翻弄していたのだ。

困った藤吉郎は須藤・竹中・蜂須賀等の股肱の家臣を率いて稻葉山を偵察し弱点を探していた。

「むう・・・これだけ弱点が無いとのお・・・」

藤吉郎が困り果てた顔をしてブツクサ文句を言いながら慎重に道を進み始めた、それもそのはずかれこれ三時間以上も稻葉山を這いずり回り時には歩哨の目を誤魔化しながら進んでいたのだ、疲労困憊もムリが無かつた。

「そうですね・・・搦め手にも主力の一部を配備しているとは・・・

富田勢源と言う人物もなかなかの策士ですね・・・」

半兵衛が珍しく顔を真つ青にして汗を拭きながらうめいた、さすがの半兵衛も富田勢源なる人物を認めた、それだけで藤吉郎に力攻めを決断させたのである。

「しかたあるまい・・・今日は引き上げるか・・・」

小六がヒイヒイ言いながら枝に掴まって弱音を吐いた、藤吉郎はこれ幸いとうなずいて半兵衛に会釈した。

が、空が紅に染まつても一向に山から出られる氣配は無く・・・とうとう空は真っ暗になってしまったのである。

「あははは・・・迷いましたかね・・・どうしましよう?」

半兵衛が苦笑いを浮かべて先頭を歩いていた藤吉郎に声をかけた、藤吉郎の顔はもはや藍より真っ青になつていて一言も発せずにいた。

「うう・・・腹が減つた・・・藤吉郎殿お・・・わしゃ腹が空き過ぎて死にそうだ・・・」

小六が益々子供じみた弱音を吐いて不平不満を述べた、須藤はその弱音を止める為に懐からもしもの時の為に取つておいた兵糧米を小六にすつと差し出した。

「おや?お武家様・・・こんな時間にこつたらどうで何を?」

獵師の格好をした青年が突然茂みの奥から出てきた、一行にはこの者が助け神に見えた、だがここは敵地もしや敵かも知れぬと言つ考えが頭をよぎった。

「いや面白い・・・わしら織田家に仕える者なんじゃが・・・道に迷つてしまつてな、一晩でいいから泊めてくれぬか?」

他の者の不安を一切無視するかのように藤吉郎がアハハハと笑いながら青年に声をかけた、それはいつも通りだが何故か殴りたい衝動に駆られた。

「ええ・・・いいですよ、山菜と猪で作った鍋物しかありませんが・

・・それでよろしいのであれば・・・」

青年が撃ち殺した猪を見せて満面の笑みを浮かべた、その表情に敵意は全く無くむしろ仏のようであった。

これが後に豊臣三中老の一人で「仏の茂助」の異名を取った・堀尾吉晴との出会いであった・・・。

第十五話～稻葉山の出来～（後書き）

最近youtubeなるサイトで笑える動画や面白い動画を見るのに填っています。

決してそのせいでHPが遅れた訳では無いのぢゃ

第十六話～四面楚歌の危機・前編～（前書き）

本当に更新遅れてすんませんでした。

執筆活動を再開させていただきます。

第十六話／四面楚歌の危機・前編／

- 山小屋 -

藤吉郎一行は青年の厚いもてなしを心から堪能し既にほろ酔い気分となっていた。

「ほお・・・貴殿は斎藤家にお仕えなされていた堀尾泰晴氏の御嫡男・堀尾茂助殿でしたか・・・」

半兵衛が頬を微妙に朱に染めて杯を傾けた、堀尾泰晴かつては斎藤家でも1、2を争う剣術の腕前の人物であった。

堀尾泰晴、彼は斎藤道三・斎藤義龍・斎藤龍興三代に仕えた剣術師範であつたがある日刺客の襲撃を受けて死亡、父と違つて剣術の才能も無くかと言つて知略もお世辞にも無い茂助は城から追放されたのである。

「父上の名をござ存じでしたか・・・」

茂助が鍋の中の野菜を器に運んで懷かしそうにポツリと言つた、茂助が仕留めた猪の味は格別で陣中食よううまかつた。

一行は茂助が侍として召し抱えられたいと思っていた事を知り藤吉郎が率先して仕官するよう進めたが「やれねばならない事がある」と言つて首を縦に振らなかつた。

茂助の好意により一晩だけ宿を借りることになつた。

彼曰く「外は斎藤家の歩哨だらけです、明日の朝私が抜け道まで案内しますので、今日はお泊りください」とのことであつた。

そしてすっかり夜も更け皆が床についた時、複数の殺氣を感じた須藤は太刀を片手に飛び起きた。

「藤吉郎様・・・囮まれております」
須藤が隣で大いびきを搔いていた藤吉郎を揺すつて無理矢理起こした、小六も殺気に気がついたのか太刀を持って小窓の隙間から外を覗いていた。

「人数は・・・ざつと二十数名つて所か・・・」

小六が太刀を抜いて小窓をピタリと閉じた、藤吉郎も須藤に起こされてようやく事態を察知した、半兵衛も護衛用の小太刀を抜いて息を潜めていた。

「事は荒立てなくないが・・・小六・清則・・・頼むぞ」

藤吉郎が太刀を握りしめて少しふるえて言つた、藤吉郎は頭脳は一級品だが剣術の腕前は家中でも下から数えた方が早かつた。

「はつ・・・小六、お主は裏から・・・俺は表から行く」

須藤がスラリと太刀を抜いて小六と意思疎通を図つた、小六はコクンと頷くと足音を立てずに裏口へと回つた。

「堀尾殿は?」

半兵衛がこの小屋の主がいなくなつた布団をひつペ返して須藤に聞いた。

「清則、氣い付ける・・・堀尾殿の種子島がなくなつてゐる」

藤吉郎が壁に立てかけてあつた茂助の火縄銃がなくなつてゐる事に気がついて清則に注意を促した。

「 いるのは分かつておる！！出てまいれ！！」

外から斎藤家の足軽達の叫び声が聞こえてきた、清則はこの時茂助が斎藤家と内通し自分たちを暗殺しようつと田論んでいたと思い込んでいた。

清則は戸口に耳をそばだてて敵の息遣いと足音で正確な人数を把握しようとしていた。

だが外は風が強く足音も息遣いも聞き取れなかつた、だが把握しているだけでざつと二十数名と言つたところであつた。

（小六の読み通りだ・・・さて、どうするかな・・・足軽はともかく火縄銃で狙われたら最後・・・か）

清則が刃を鏡にして外の足軽達の持つ得物を確認して考え込んだ、太刀・槍は確認できたが火縄銃がどこにあり、どこから狙つているか確認できなかつた。

「三つ数える！！それまでに出てこなければ踏み込むぞ！！」

足軽の頭と思わしき男の怒鳴り声が闇夜に響き渡つた。

（ええい！！考へても始まらぬ！！まよよ！！）

清則は考へることを辞めて勢い良く戸口を蹴り倒して外に飛び出した。

「 な、なんだ貴様は！！」

足軽頭が驚いた顔で小屋から飛び出して来た清則をにらみつけた。

「 我こそは織田家足軽大将・須藤清右衛門清則なり！！」

清則が太刀を構えて声を張り上げた、その瞬間風が止み雲の間から月光が差し込んだ・・・。

第十七話～富田勢源～（前書き）

少しスランプ気味・・・。

第十七話／富田勢源

清則の太刀が月の光を浴び妖しく青白く光っていた。

「何つ！彼奴め！織田と手を結んでいたのか！？」

足軽達の頭が得物を構えて叫んだ、その部下達の数はおよそ24名と明らかに歩哨の域を越えていた。

「何の事か分からぬが・・・見られたからには死んでもらおうか！」

清則が太刀を構えて叫び、敵の真っ只中に飛び込んだ。

一振りで二人の足軽の首を刎ね、返す刃で側面から襲い掛かろうとした者の槍の穂先を叩き折った。

そしてそのまま槍の柄をつかみ、自分の方向へ引き寄せるとすれ違いざまに腹を鎖帷子ごと切り裂いた。

・・・殺し。殺戮し。屠る。

その一連の動作は多くの戦場を越えてきた『いくさ人』の剣筋であった。

流派など無い、これは彼の自己流の剣術である、戦場を一つ一つと生き延び・・・。

・・・幾つもの血の大河と屍の山を越えて出来た一種の洗練された美術品であった。

やがて彼の周りに動くものがいなくなつた時、始めて清則は太刀を降ろした。

「」うちはあらかた片付いたぜ、清則の旦那……だ、旦那？」
小六が思わず言葉を失い息を飲み、震えた。

そこには紅月の光に照らされた紅い鬼が返り血で紅に染まつた太刀を携え、紅い血の大河の真ん中で立ち尽くしていたのだ。

「小六か……」

清則が太刀に付いた血を振り払つて鞘に収めた。

「あ、ああ……にしてもすげえな旦那……」

小六が首を飛ばされた屍をひよいと避けて咳いた、その切り口は鮮やかで恐らく痛みすら感じずに死んだのだろう。

「別に……それより殿と半兵衛殿は？」

清則がスッと血で塗れた手で髪を搔き揚げて聞いた、その目は未だ死闘の興奮の色が残つていた。

だが突然一人とも何かの気配を感じて思わずそこから飛びのいた、先ほどまで一人が立つていた所に棒手裏剣が突き刺さつていた。

「ほお……勘が良いのあ……さしづめ野生の勘と言う物かの？」
林の奥から不気味な老人が杖を付いて静かに歩み寄ってきた。

その身のこなしに物腰、とても常人とは思えなかつた。

「爺さん……何者だ、あんた……」

小六が太刀の柄に手をかけて老人を睨み付けた。

「小六、下がつてろ……この爺さん、只者じゃない……」

清則が老人を殺氣を込めた目で睨み付けて小六を制止した。

「ほあ・・・そういうお前は何者だ？山犬や狼みたいに血の匂いをさせて」

老人がクツクククと笑みを浮かべて言った、その声は地の底から聞こえるほど低く感じられた。

「何が言いたい・・・」

清則が太刀の柄を握り締めていつでも斬りかかるような体勢に入つた。

「お前の剣は畜生並だと言つておる・・・」

老人がニヤリと笑つて清則を卑下した、その言葉で清則の中の何かが切れた。

「ほざけ！－ジジイ！－！」

清則が勢いよく太刀を抜き拵つた、おおよそ常人の目には止まらぬほどの速さで・・・。

ギイン！－

だがその老人は持つていた杖でそれを難なく止めて更に邪悪な笑みを浮かべた。

「見当違ひだつたな、犬畜生以下の獣の剣だなコレは・・・」

老人が杖をクイっと上に払つて刃を受け流した、そしてそのまま肘と杖の先端で刃を挟み込み・・・一気に叩き折つた。

そして杖で清則のわき腹を思いつきりたたき付けた。

「ガツ・・・はつ・・・」

清則は思わず膝を地面に突いてしまった、肺から息が流れ出し胃液が逆流し始めたのだ。

「だ、旦那！－何者だてめえ！－」

小六が清則を守るように立ちはだかつた、老人はフォツホホホと笑い始めた。

「おお、忘れておつたわい・・・ワシは中条流伝承者・・・富田勢源と申す」

勢源が深々と礼儀正しく一人に挨拶した、そしてその老人は『さて、止めをさそうか』と呟いて杖をギュッと握り締めた。

パーン！！

静かな山に一発の銃声が鳴り響いた、その魔弾は勢源を確実に狙つての物であった。

だが勢源は素早く身を一歩退けて難なくそれを回避した。

「ほ、堀尾殿！！」

林の影から突然茂助が飛び出してきた、その手には一丁の種子島が握られていた。

「ふむ・・・堀尾の一人息子か・・・臆病者がよく出てきた、その威勢だけは褒めてやろう」

勢源がその見えない目で確実に茂助を睨み付けて言った。

だがその二人の間に別の人間の気配を悟つたのか同じ方向をにらみつけた。

「勢源・・・その辺にしておけ、楽しみは後のこといつておけ」
そこに立っていた男一人、斎藤家現当主・斎藤龍興であった・・・。

第十八話／四面楚歌の危機・後編／（前書き）

前の話は幕間つてことにしていくだれい w

第十八話／四面楚歌の危機・後編／

斎藤龍興、父は土岐氏の流れを組む猛将・斎藤義龍、そして祖父は戦国の梶雄にして信長の義父でもある・斎藤道三。

史実において彼の前半生は竹中半兵衛によつて僅か十数名の兵で稻葉山城を奪われたり、安藤守就・稻葉一鉄・氏家ト全の西美濃三人衆に裏切られたりと散々な目にあつてきた。

だが後半生は祖父・斎藤道三に見劣りしない程の知恵者ぶりを見せた、足利義昭を擁立して本願寺・浅井・朝倉・武田・毛利と言った強大な大名に対しても反信長同盟を結成し日本を一個の戦場に見立てた戦略を立てた程であった。

「斎藤・・・龍興・・・」

茂助が思わず息を飲んだ、彼はかつて幼い頃に斎藤家の始祖・斎藤道三と面会したことがあった。

その時の威圧感、相手に畏怖の念を抱かせせる目付き・・・その全てが似ていた。

かつて酒色に溺れ『戦国の暗君』と言われていた男ではなかつた。

「堀尾茂助・・・否、堀尾吉晴か」

龍興がまるで虫けらを見るかのように冷たい目で茂助をチラリと見て、すぐに顔を背けた。

後にその場に居合わせた小六はこう語る『信長公に初めてお会いしたとき、魔王と呼ばれる所以が分かった・・・されど龍興公には遙

かに及ばなかつた』と。

「龍興様、こやつ等の始末は私めが・・・」

富田が杖の柄に手を掛けてソレを一気に引き抜いた、杖は仕込み杖であったのだ。

「ふむ・・・興味が沸いた、そやつらは生かしておけ
龍興が地面に蹲つてゐる清則をチラリと見て背を向けた。

「はつ？で、ですが・・・こやつ等を生かしたままでは計画が・・・

富田がオロオロと龍興に進言した、だが龍興は振り返らなかつた。

「良い、虫けらを幾つ踏み潰そつとも・・・天の高みには届きはしまい」

龍興がクックククと笑いながらそのまま歩きだした。

「・・・御意・・・清則、信長に伝えよ『我等は城を捨てる、捨つなり焼き払うなり好きにしひ』とな」

富田が複雑な顔をして吐き捨てるよつて咳いて立ち去つた。

「はあ・・・つたぐ・・・生きた心地がしなかつたぜ・・・」

小六が一人が立ち去つた後にその場に腰を抜かしたように座り込んだ。

「畜生・・・畜生・・・」

清則が両手で土を掴み、その拳で何度も地面を叩きつけた。

「清則殿・・・命が助かつただけ良かつたではありませぬか」

茂助が肩を貸そと清則に歩み寄つたが、清則は手を振り回してそ

れを拒絶した。

「何が戦国一じゃ……たかが老人1人に膝を突かされ土に塗れるとは……なんたる屈辱じゃああ！！！」

清則が顔を上げ月に向かつて咆哮した、その叫びはまさに孤狼が月に向かつて吠えてるようなものであった。

「旦那……」

小六が思わず異様な光景に言葉を無くしていた。

「かくなる上はこの腹割いて死ぬまでじゃ！！！」

清則が脇差を抜いて結い上げた髪を振りほどいて叫んだ。

「き、清則殿！！（だ、旦那！！）」

茂助と小六が慌てて清則の腕を押さえつけて脇差を取り上げようとした。

「ええい！！放せ！！放せい！！」

清則がガアアアアアと吠えて二人を振りほどこうとした、その時突如拳が清則の頬を打つた。

「と、藤吉郎……」

小六が怒りの表情を浮かべて拳を握り締めてる藤吉郎を見上げた。

「藤吉郎様……」

清則が頬を押さえて驚いた表情で藤吉郎を見た、生まれて初めて本気で殴られたのだ。

「こんのかわけ者が！！死んで何になる！！悔しかつたらがむしやらに生きて強くなりやええじゃろ！！死ぬなんざな、ただの逃げじ

や！お前は武士もののふじゃらつが！戦わずして逃げるのがお前の生き様か！？」

藤吉郎が清則の襟首を掴んで一気にまくし立てた、その言葉に清則は涙を流して地面に蹲つた……。

その頃、闇に包まれた山の中を疾走する一人の騎馬武者の姿があつた。

斎藤龍興と富田勢源の二人であつた……。

「勢源、腕の傷は痛むのか？」

龍興が馬を飛ばしながら後ろをピタリと離れずに疾走する勢源に話しかけた。

「はつ・・・

勢源が血が流れる腕を抑えてながら呻くように呟いた、最初に清則に切り付けられた時に彼の太刀を捌ききれなかつたのだ。

「それと、その杖は捨てろ・・・使い物にならん」

龍興が小枝を避けながらかすかに呟いた、その意図を汲み取れず勢源がスッと杖を抜いて触つて調べて見ると、刀身に亀裂が入つていたのだ。

「最初に捌いた時・・・ですかね？」

勢源が杖をポイッと崖の下に向かつて放り投げて聞いた。

「さあ？だが・・・あの須藤清則とか言つ男、もしかすると我が策を成就させる最大の障害やもしれぬな」

龍興が楽しそうに笑いながら言つた、この男は幾つもの修羅場を潜り抜けてきた、故に既に精神に異常をきたしていた……。

四面楚歌の危機は去つた、だが清則にとっての戦国疾走はこれから始まつたばかりである。

第十九話 別れ（前書き）

いきなりの急展開ですが、そこは『愛嬌つて事で目を瞑つてください。

第十九話 別れ

清則一行は新たに堀尾茂助を配下に加えて稻葉山を後にし、陣所に帰還した。

そして藤吉郎はそのままを信長に報告した、富田勢源に清則が敗北した事・斎藤龍興が稻葉山城を捨てて逃亡した事の一いつを、仔細ありのまま報告した。

「猿、ご苦労であった・・・下がつてよいぞ」

信長がその報告を知っていたと言わんばかりの表情をして呟いた。

「はっ・・・これより稻葉山総攻撃にかかります」

藤吉郎が疲れを見せないように立ち上がりて陣所を後にした。

今、陣所には須藤清則と織田信長の一人だけであった。

どちらも口を開かず黙したまま一言も語らなかつた。

「清則・・・よござ生きて戻つた」

最初に言葉を発したのは信長であつた、そしてそのまま立ち上がる
と清則の前に腰を下した。

「大殿・・・面目次第もございません・・・」

清則が深々と頭を下げて詫びた、詫びる相手は信長と織田家そのもの
のであつた。

「清則、クヨクヨするでない・・・『敗北を知らない者に勝利は無い』
と言つ、そもそも戦いの勝敗は兵家の常じや」

信長がポンポンと清則の肩を叩いて励ました。名門今川家を滅ぼし、そして今斎藤家を滅ぼし天下に飛翔しようとする信長らしからぬ言葉であった。

「は、はあ・・・・

清則がどこか腑に落ちない顔をして相槌を打つた。

「ふむ・・・数ヶ月前まではただの足軽だった主が今や織田家一の猛将・・・数奇な運命とは思わないか?」

信長が腕を組んで昔を思い語り始めた。

確かにこの数ヶ月で清則の人生はがらりと変わった。

本多忠勝との一騎打ちで名を轟かし、三河衆と共に今川家を滅ぼし『織田家に須藤清則あり』とまで言われるほどにまで成長していた。『そう言わるとどうですか・・・まあ』とに数奇な運命で『やそこますな』

清則が考え込むような顔をして呟いた。

この時代の足軽など斬られ・撃たれ・突かれ・踏み潰されて散り行く存在であった。

その足軽が今や織田家の重臣となつていたのだ。

「ワシは天下を取る以外にもう一つ夢がある・・・清則、お主がどこまで成長するか見届けてみたいのだ・・・」

信長が戦国大名としての夢と戦国武将としての夢を語った。

その日は我が子の成長を見届けたいと願う父親の日であった。

「わ、ワシがですか・・・？」

清則は呆気に取られてポカンと口を開けていた。

「つむ・・・お主とは一度でいいから戦場で思いつきり戦つてみたい

信長が眞面目な顔で清則の目を見つめて、己の望みを明らかにした。

「・・・」

主たる信長の率直な言葉に清則は困惑した。

「だが、今じや満足に戦えぬ・・・清則、今日限りで主を織田家家臣の任を解く」

信長が思い切ったことを口にした。斎藤家を滅ぼした後各地で戦わなければならぬのに織田家一の猛将を解雇すると言ったのだ。

「え?・・・」

清則が愕然とした表情で返事をした。

「日本は広い・・・そして各地で名だたる大名どもがしのぎを削りておる、それを検分し、より強くなつて戻つてしまれ!!!」

信長はそう言い放つと立ち上がり稻葉山攻めの指揮を執る為に陣所を後にした。

清則はその足で藤吉郎に信長から伝えられたことをありのまま報告した。

「せうか・・・信長様がそのようなことを・・・いかにワシと謂えども殿の命令には逆らえまい・・・清則、今までご苦労であった藤吉郎は悲しそうな表情を浮かべて清則の肩を軽く叩いてくれ違う

よう立ち去つた。

かくして主従関係は終わりを告げ、清則の新たな日々が始まつた
していた・・・。

第一十話～旅立ちと仲間～（前書き）

すんごく疲れましたw
評価待ってますw

第一十話～旅立ちと仲間～

稻葉山陥落の二日後、清則は尾張と三河の国境に立っていた。

清則を見送る為に木下藤吉郎・竹中半兵衛・前田利家・浅野長政（改名して浅野長政）の四人とその他が見送りに来ていた。

「殿、今までお世話になりました……」

清則が深々と頭を下げて礼を述べた、せめてもの饗別として結構の額の路銀を渡されていた。

「つむ・・・お主も元気でな」

藤吉郎が涙を堪えるように瞬きをしながら弦じた。

「お主と肩を並べて戦えた事・・・俺は終生忘れないぞ！」

利家が清則の肩をがっしりと掴んで揺さぶりながら呟んだ。

「清則殿、お元気で・・・これは三河に着いた時に読みなされ半兵衛が清則の手を握り、その手に文を握らせた。

「皆様・・・達者で・・・」

清則が槍を片手にもう一度頭を下げて振り返らずに三河へと入つていった。

「これで・・・よひしいのですか？」

長政がぼそりと呟いた、藤吉郎の心中を察して口を開いて言った。

「奴はワシの配下で終わらせるには勿体無過ぎる・・・それでいいのだが」

藤吉郎が涙を堪えながら段々遠ざかる清則の背を見送りながら呟いた。

しばしつき続け、日が傾き始めた頃に清則は三河は岡崎に入った。

そこで思い出したかのように半兵衛から手渡された文を開き始めた。

『清則殿へ、貴殿がこれを見る頃は三河に入っているはず・・・岡崎のはずれにある荒寺に貴方を待つている者達があります』

とだけ記されていた。

「ワシを待つている者・・・はて?」

清則が文を懐に入れて首を傾げながら入づてに聞いた荒寺の方角へと足を向けた。

その荒寺に着いた時には既に日が沈みあたりが闇に包まれた頃であった。

如何にも盜賊が住んでそうな古ぼけた荒寺はひつそりと静まり返り、物の怪が出てきそうな不気味さであった。

清則は「よし・・・」と呑くと荒寺のお堂の戸を勢いよく開けた。

「お、お主らは・・・」

清則は中に入つて思わず驚きのあまり槍を落としてしまった。

「元織田家家臣・木下小一郎!! 清則殿に着いて行き申す!!」

藤吉郎の弟にして織田家家臣の木下小一郎が柱にもたれ掛かつて叫んだ。

「同じく元織田家家臣・前田慶次郎利益！！俺も連れて行ってくれ！！」

前田利家の兄・前田利久の子（一説には滝川益氏の子とも）にして史実では秀吉・家康に恐れられた古今無双の猛将・前田慶次であった、ちなみにこの時まだ12歳である。

「元小寺家家臣・黒田官兵衛孝高！！師・竹中半兵衛殿の薦めによつて同行いたします！！」

史実では小寺家家臣にして豊臣家臣、そして秀吉に「ワシ以外に天下を取れる男」と恐れられた謀将・黒田官兵衛である。

「お主等・・・」のうつけどもめ・・・よく来てくれた！」

清則が苦笑いを浮かべた後、満面の笑みを浮かべて三人の肩を抱いた。

「俺たちだけではござりませんぞ？」

慶次がニヤニヤと笑いながら柱の陰を指差した。

そこには旅装束に身を固めた女性が頬を微かに赤く染めながらモジモジしながら立っていた。

「千里殿・・・」

清則が呆けに取られたような顔をして千里を見た、初めて会つたときあれだけ拒絶されたのでその驚きは計り知れなかつた。

「あ、あの・・・父から文を預かっております」

千里が慌てた手つきで半兵衛からの書状を清則に手渡した。

そこには『千里は貴殿を慕つておる様子、どうかお頼み申します』

とだけ記されていた。

「おやおやおや～？清則殿？顔が赤いですぞ？」

慶次がまだニヤニヤした笑みのまま清則の背中を肘で突付いた。

「あ、あのーーふつつか者ですが・・・」

と「ハニミハニミ」と語尾を濁しながら千里が呟いた。

「え？あの・・・えっと・・・」

清則が困ったといわんばかりに鼻の頭を搔きながら拳動不審者のよう

に目を泳がせながら呟いた。

「もそつと寄れ寄れい！！恥ずかしがらすにもそつと・・・あ痛つ
！！」

慶次が冷やかすように一人をくつつけようとした所に小一郎のゲン
コツが慶次の脳天を打つた。

「この石頭め・・・慶次、そう冷やかすなよ・・・清則殿も困つて
おられるではないか

小一郎が痛みでしびれる手をヒラヒラと揺らしながら慶次を叱りつけた。

「小一兄いは冗談が分かってないな・・・官兵衛殿も何か言ってや
つてくれよお」

慶次が頭を押されて官兵衛に意見を求めた。

「それで、清則殿・・・これからいはずに向かわれのです？」

官兵衛があつさり無視して清則に問いかけた、とりあえず三河に入
ったからには何処へ向かわなければならなかつたのだ。

「無視？ 酷くない？」

慶次がブーブーと不満を言いながら、その場に座り始めた。

「いや、特に決めてはいないが……」
清則が暖炉に枝をくべながら呟いた。正直これからどうしようかな
んてまったく考えていなかつたのである。

「なれば甲斐へと向かいましょう……長篠から北へと向かつたと
ころです」

小一郎が懐から地図を取り出して清則に説明を始めた、甲斐と三河
はちょうど隣国に当たるのだ。

「甲斐といえば……かの武田信玄公の領国ですか？ いいですね、
私も信玄公の軍略を見てみたいですね」

官兵衛がフムと頷いて小一郎の意見に同調した、甲斐の武田信玄と
言えば知らぬものいない戦国きつての名将で、その用兵は戦国一
と呼ばれるほどであった。

「ふむ、では明日にでも甲斐に向かうとしようか……」

清則が地図を見ながら呟いた。清則も一度武田信玄を見てみたいと
思つていたのだ。

「では、今日はもう休むとしますか？」
小一郎が墓塚を敷きながら聞いた。

「そうだな……」

清則も暖炉の傍で横になつて静かに目を閉じた……。

（甲斐・・・か）

と清則は眠りに落ちる寸前に静かに呟いた。

織田家を放逐された清則、だがその人徳を慕つて4人の仲間を得た。
そして甲斐の武田信玄との出会いで清則は何を学ぶのか、それはまた後の話である・・・。

第一十一話 徳川家の台頭（前書き）

色々あって更新が半年以上遅れたことを深くお詫びします。

第一十一話 德川家の台頭

清則一行は長篠へと向かう道中、思わぬ人物と出会した。曳馬城、改め浜松城へと居城を移そうとしていた松平元康の行列であった。隠密も同然の清則達は行列の邪魔にならぬよう道の端に伏して領民達と同じように平伏していた。

「あれが徳川家康公……」

官兵衛がちらりと目の前を通り過ぎた時、突然1人の騎馬武者が一行の前で足を止めた。

「む？ 貴殿……もしや、須藤清則殿では？」

懐かしい声に思わず清則は顔を上げた。威風堂々とした斑模様の馬に跨つた男。

脇に抱えた大槍、そして幾度も戦場で見た鹿角脇立兜……誰であろう本多忠勝その人であった。

「本多……忠勝殿？」

清則が思わず呟くと同時に忠勝は馬から降りて清則に歩み寄った。

徳川家において須藤清則とは今川家を滅ぼすのを協力してくれた恩師同然だったのである。

「如何した、平八郎？」

そこにもう一人見知った顔が現れた、松平元康改め徳川家康である。目深に笠を被っていたが彼自身から放つ戦国大名としての威風が隠し切れていなかつた。

もちろん、一同はこれに驚いた。先ほど輿が目の前を通り過ぎたばかりだつたのに、輿に乗つっていたはずの家康が目の前に現れたのである。

「と、殿！――何のための影武者ですか！――」

忠勝が馬上の家康を守るように立ちはだかつて諫言した。忠勝の言から察するに先ほど輿に乗つっていたのは家康の影武者と言つことである。

家康は祖父である松平清康を始めに父・広忠をも暗殺で失っているので、刺客対策として影武者を用いていたのである。

無論、これは徳川家だけで無く各地の諸大名も影武者を立てることが多かつた。

余談ではあるが、桶狭間の前に敦盛を舞つた信長公は実は影武者との説がある。

これも余談だが『徳川に徒なす刀』と知られる村正は清康・広忠が暗殺されるのに用いられたとされ、更には嫡男・信康を介錯したと

伝えられるからである。しかし、本多忠勝の愛槍である蜻蛉切もまた村正の作である。

「おお。貴公は須藤清則ではないか！！」

家康が馬から降り、忠勝を押し退けるようにして清則の手を取った。途端にあちこちからざわめきが起きたのも無理はなかつた。

「家康様も相変わらずお元気そうで何よりです。」

清則が家康に深々と頭を下げた。家康はそんな堅苦しい挨拶は要らぬと黙つて清則を立たせた。

「おや。貴公は確かに木下殿の・・・」

家康が清則の側に控えていた小一郎に気がついて声をかけた。この時点では家康はある事に気がついていた。

事実上織田家の重臣とも言える須藤清則。

そして織田家家老の木下篠吉郎の弟・木下小一郎。

篠吉郎の軍師である竹中重治の娘・竹中千里。

前田利家の義理の甥である前田慶次。

小寺家家老で織田家への使者としてやつてきた・黒田官兵衛。

この5人が美濃から三河へやつてくると言つことは何か重大な仕事を請け負つているに違ないと確信していた。

「殿、如何致しました？」

徳川家康の股肱の家臣の一人であり、家康を知の部分で支えた本多正信が家康に歩み寄つて伺いを立てた。

家康は現在浜松への移転の途上にあり、ここで時間を無駄に浪費すべき場合ではなかつたのだ。

「弥八郎（正信の別名）と平八郎、この者達の用件を聞いておけ。」

家康は正信と忠勝にそつ命じると颯爽と馬に乗り、行列へと戻つて行つた。

「ははあつ！！」

二人が頭を下げるといふ人を連れて近くにある庄屋の屋敷へと向かつた・・・。

第一十一話 戦友

まだ日が昇つてゐる途中と申すのに屋敷の中は暗かつた。

雨戸を閉め切り、明かりと言えば部屋の真ん中には蠟燭が一本置かれていただけである。

それもそのはず、この家の主人が徳川家と織田家（元だが）の名将達が会談するのに盗み聞きされでは拙いと氣を利かせてくれたのだ。

「さて・・・織田家の用件を聞かせていただきましょうか」

蠟燭の明かりに照らされ、幽靈のよつと青白い顔をした正信が口を開いた。

「実は・・・」

清則はそう切り出すと全てを伝えた。織田家を放逐され諸国を見て回ると申すことをも伝えた。

忠勝は腕を組み『あ～』とか『う～』とも呻いていた。だが一方の正信は静かに目をつむっていた。

「それで、清則殿・・・これからどうぞ」

正信が目を開いて静かに聞いた。その顔は相変わらず青白く、おそらく夜道で出会つたら逃げ出してしまつような顔をしていた。

「甲斐へ行こうかと・・・」

清則が地図を出して甲斐への通行路を説明した。岡崎へ長篠を抜け、信濃を経由して甲府へと向かうつもりであった。

「甲斐と言えれば……あの信玄坊主の所とな？」

忠勝が言葉につづすらとながらも敵意を交えて聞いた。

それもそのはず。前年に徳川・武田間で結ばれた大井川同盟を武田側が一方的に破棄し徳川領の遠江に侵攻してきたのだ。

大井川同盟とは徳川・武田間で旧今川領の分割統治に関する同盟である。大井川から西は徳川が、東は武田が統治するとの約定である。しかし、領土拡大欲に燃える信玄はこの約定を破棄し遠江に兵を進めてきたのである。

「信玄公の元で兵法を学ぼうと思つてましてな……」

清則がそう言つと忠勝は「これ以上咎める」とは出来ないと呟つ顔をした。

「そうか……」

忠勝はそつと腰から銀がぎつしりと詰まつた袋を取り出し、清則に差し出した。

「これは？」

小一郎が代わりに袋を受け取つて聞いた。いわゆる路銀である。

「甲斐までは何かと物入りであろう。少ないが餞別として受け取つてくれい」

忠勝が破鐘のように笑いながら言つた。だが忠勝の心境は複雑だつた。

本当は友と馬を並べて戦いたかったが、これも戦国の世。友、親子、兄弟が敵味方に分かれて戦うのもまた一興だと納得せざるを得なかつた。

「忠勝殿・・・」

長篠へと至る分かれ道まで見送りに来てくれた忠勝達を振り返つて清則は呟いた。

忠勝はその視線に気がついたのか清則に向けて手を小さく振つた。

「（また会おう・・・戦友よ）」

忠勝は手を振りながら段々と小さくなつて行く戦友の背中を見送つた。

第一部甲斐の虎編へと続く・・・。

第一部第一話～甲斐の虎～

甲斐の虎こと武田晴信。またの名を武田徳栄軒信玄。

朝廷より従四位下大膳大夫を与えられ、信濃守の称を得る。また室町幕府より甲斐守護職と信濃守護職を与えられた。

戦国最強と讃れ高い精銳騎馬隊である『赤備え』を有し、甲州金山を始め多くの金山を統治するまさに戦国の雄である。

だが、そんな彼にも常について回る詫まわしい過去があった。

・・・・『武田の不忠息子』。

事の発端は天文十年（1541年）に起こった武田家の内紛である。

当時20歳だった信玄が宿老であり有力国人領主の板垣信方や甘利虎泰、飯富虎昌等に擁立され、父に反旗を翻したのである。

娘婿でもある今川義元を訪れに向かつた隙を突いて信玄は甲斐～駿河間の街道を封鎖し、信虎を甲斐より追放したのである。

それ以後、信玄には『甲斐の虎』以外に『武田の不忠息子』と詫まわしい影名で呼ばれることがあった。

しかし、信玄はその過去を払拭するが如く天下統一事業を急いだ。

それから12年後に隣国信濃を平定し（北信濃を除く）朝廷から信

濃守護職を拝命し信濃領有の正当性を訴えた。

甲斐・信濃を平定し順調に見えた信玄の天下統一事業の前に思わぬ人物が立ちはだかった。

信玄にとって生涯の宿敵であり、越後の龍こと長尾景虎である。

第一次～第五次と五度に渡り川中島で長尾軍と雌雄を決する決戦を行つたが決着は付かなかつた。

長尾軍との戦いで武田軍の天下統一事業は大幅に停滞し、越後侵攻を諦め駿河へと田を向けていた・・・。

甲斐 甲府 蹴躅ヶ崎館

夜明けより数刻前、信玄はふとした物音で目が覚めた。

「何者か?」

信玄がうつすらと目を開けて聞いた。すると天井から音もなく一人の屈強な体つきをした男が降りてきた。

信玄は懐に隠し持っていた懐剣に手をかけたが、男の顔を見るとその手を柄から離した。

「守清か・・・。何時からお主はワシに夜明けを告げる役目を仰せつかつたのかのう?」

信玄が冗談めかしながら目のために跪く透破に声をかけた。だが目の

前の透破はその「冗談をも軽く受け流した。

この男、戸石城主真田左衛門尉信綱の家臣であり甲州透破の支配者である。名を出浦守清と言つ生まれついての忍びである。

「奴らの消息が掴めました・・・」

守清がそう言つと信玄の目つきがスッキリ代わり、先ほどまでの好々爺みたいな顔が一瞬して真剣な顔つきになつた。

「・・・予想より早かつたな。それで、奴らは何処へ?」

信玄が布団から起き上がりて居住まいを正した。その顔には謀略と殺戮の中を生き延びてきたいくさ人の威厳があつた。

「奴らは長篠を抜け、戸石へと向かっております・・・」

守清が地図を取り出して信玄に説明した。信玄はその答えを聞くとニヤッと不敵な笑みを浮かべた。

「ほう。戸石・・・か」

信玄がパシンと膝を叩いてまたもや不敵な笑みを浮かべた。

戸石と言えば守清の上司でもある真田信綱の本拠であり、武田の領国でもある。

「・・・信綱様には何とお伝えすれば?」

守清がそう伺いを立てると信玄は文机の前に座り、墨を擦り始めた。

信玄は筆を手に取ると何人かの人名を紙に書いた。

須藤清則。

黒田官兵衛考高。

木下小一郎。

前田慶次郎利益。

竹中千里。

以上五名の名が連ねてある書状を守清に手渡した。

「奴らを捕らえろ・・・決して殺すでないぞ」

信玄はそう言い終えると再び布団に潜り込み目を閉じた。守清はその書状を大事そうに懐にしまつと再び夜明け前を告げる瑠璃色な外へと飛び出して行つた。

「（まさか奴らからこいつらに出向くとはな・・・ワシにも天運が向いてきたと言つことか・・・）」

信玄は微睡みの中に落ちていきながらそう思い、笑みを浮かべ眠りについた。

甲斐の虎と須藤、二人の出会いが一歩ずつ近づきつづつあつた・・・。

第一話～真田一族～

小県郡。かつては信濃の豪族の一人である真田氏の所領であったが、村上氏にその地を追われたのである。

そして北信濃の雄である村上義清が彼の地に大改築の末に堅城・戸石城を築いたのである。

後に義清は戸石崩れにおいて信玄に手痛い打撃を与えることに成功する、しかし武田に身を寄せていた真田幸隆の謀略により彼の地より追われるうことになる。

その功績により幸隆は戸石城主を拝命し、子の真田昌幸が上田に城を築くまでの間真田氏の拠点となつたのである。

戸石城 中庭

夜明けと同時に各々の仕事を始める家臣達。ある者は城主を起こしに、ある者は掃除を始めたりと城内は活気に満ちていた。

だが。今日はいつもと比べて空気が違つなど真田幸隆は肌で感じていた。

嫡男の信綱に家督を譲つたにも関わらず幸隆は書斎で日々書物を読みあさり、解釈をつけると言つた悠々自適な生活を送つていた。

「これ。何かあつたのか？」

幸隆は田の前を通り過ぎようとした兵に声をかけた。ビードルからビードルを見ても戦に赴く兵のよつに鎧を纏っていたのだ。

「これは幸隆様。甲府の御館様より御命令がありまして・・・」

兵が幸隆の前に跪いて報告した。この時戸石城は北信濃、特に長尾家に対する備えとして置かれていたのだ。

「晴信様から御命令が？それで何処を攻めるのじゃ？」

幸隆が不審に思いつつも主命と言つて聞いてみた。兵は呆気にとられたような顔をして首を傾げていた。

「いえ・・・その。人捜しとのことで・・・」

兵がそう報告すると幸隆は頭を抱えてため息をついた。そして武一辺倒な自分の息子に少し呆れていた。

「やれやれじや・・・。信綱と昌輝、それと昌幸を呼べ。」

幸隆はやうやくと璋子を閉めて再び書へと向き直つた。

それからすぐに長男・信綱、次男・昌輝、三男・昌幸が幸隆の部屋を訪れた。

信綱と昌輝は鎧装束姿だったが、逆に昌幸は普段着のままであった。

「お呼びと聞いて参上しました。」

信綱が兄弟を代表して幸隆に言った。幸隆は読みかけの本を閉じる

と三人に向き直つた。

「信綱。御館様の御命令は人捜しと聞いたが？」

幸隆が確認するより信綱に聞いた。信綱と昌輝は何を今更と言つた感じに田配せすると一人同時に領いた。

「如何にも。御館様より浪人捕縛の令が出ておりますが・・・」

信綱がそう言つと幸隆はこめかみに手を当ててため息をついた。

「阿呆共め・・・。そのように武装してはその浪人も警戒して逃げるじやろうが・・・」

幸隆が諭すようにそう言つと信綱と昌輝はばつが悪そつに苦笑いを浮かべて鎧を解き始めた。

「父上。私に一計が・・・」

三男・昌幸が一步前に出て幸隆に進言した。真田昌幸、名将・真田信繁（幸村）の父であつて秀吉・家康を何度も苦しめた知謀の士である。

「昌幸か・・・。申してみよ」

幸隆が関心を持ったかのように言つた。幸隆は自分に近い才能を持つ昌幸を信頼しており、知略もやがては自分を追い越すだろつと思つていた。

「はい、こりは力によつて捕縛するのではなく・・・。徳を持つて

彼の者を迎えるのが上策かと・・・

昌幸の言葉に幸隆は思わず唸っていた。自分の予想した遙か上の模範解答が飛び出してきたからである。

昌幸が言つには夜盗や野武士に扮した透破達に一行を襲わせ、そこを自分達が助ければ彼らの警戒は薄れるだろうと説明した。

幸隆は昌幸の進言を聞き入れ、守清率いる甲州忍軍二十名ほどを昌幸に引いた・・・。

第三話～上田原の風～

信濃 上州街道 上田原

上田原。武田家にとって苦い思い出がある古戦場の一つである。

天文17年（1548年）に信玄は8000の兵を率いて信濃に侵攻した。信玄による信濃併合を阻止せんと葛尾城より5000の兵を率いて出陣した。

先陣を承つた板垣信方は村上義清の先陣と衝突し、これを打ち破ることに成功した。だが、ここで武田家を支え続けた老臣らしからぬ軽拳に出でてしまう。

敵前にて陣を敷き、先の戦いで討ち取った者の首実検を始めたのである。この油斷を突くべく義清は全軍に総攻撃を命じた。

義清自身も馬上の人となり、率先して兵を叱咤激励しながら板垣勢に襲いかかった。隙を突かれた信方は満足に兵を指揮する間もなく雑兵に討たれた。

また板垣勢を救援せんとして甘利虎泰・才間河内守・初鹿根伝右衛門が村上勢に挑むも返り討ちに遭い落命した。

いよいよ村上勢が本陣へと迫った時、工藤祐長（後の内藤昌豊）・小山田信有・馬場信房らがこれに当たった。

どうにか村上勢を打ち追い払う事に成功したものの信玄自身も一力所に傷を負つた。

信玄を擁立した功臣である甘利・板垣の両名を失つたことは武田軍にとってなによりの損失であった。

そんな因縁のある地を歩く清則一行。兎にも角にも武田領の信濃に入ることが出来た事からかその足取りは軽かつた。

「官兵衛殿。ここは何という地ですか？」

清則が槍を片手に歩きながら聞いた。当時の地図は現代ほど精巧では無く曖昧にしか書かれていないことが多かつた。

「ここは上田原ですな。北東に向かうと武田随一の知将と名高い真田幸隆殿の戸石城がありますぞ」

官兵衛はそう説明すると清則は驚いた顔をした。ここはまだ徳川領なかつたからなのだ。

それもそのはず、清則は従軍する以外は尾張から一歩も出たことがなかつたからなのだ。

「なんと…既に甲斐に入つていたのか！？」

清則が立ち止まりそう問いかけると官兵衛は苦笑いを浮かべた。織田家では戦国屈指の猛将とまで謳われたこの男の別の側面を見られたからだ。

「違うよ、清則殿。ここはまだ信濃ですよ。甲斐はここから南東に向かつた方角ですよ」

小一郎が清則に解りやすく説明した。清則は槍の石突きでトントンと地面を軽く叩くと気持ちの良い笑顔を向けた。

「ほおーーーこれが武田の土かーーなんじゃ、尾張と余り代わりはないなーー。」

慶次も嬉しそうに笑いながら叫んだ。今の時代における社会通念とこの時代の社会通念には大きく差があるのだ。

そう暢気に笑つていた清則と慶次だが、突然一人の顔から笑みが消えた。戦場で培つた勘が異変を察知したのだ。

今は夕刻。本来ならここにいるのは5人だけであるが・・・。突然人の気配が増えたのである。

「ぞうと・・・20名と言つた所かな?」

慶次が槍の覆いを取りながら聞いた。文字通りその矛先は敵が潜んでいる方へと向けられていた。

「そうだな・・・。」

清則が太刀を構えて呴く。その口は慶次が矛を向ける先と同じである。

古戦場を駆け抜ける一陣の風・・・。その風が上田原を再び血で染めようとしていた・・・。

第四話～高坂弾正～（前編）

やつとりじが直つました。やまつ置ひてから4年が経つと壊れやすくなるものですね。

第四話～高坂弾正～

強風が上田原を駆け抜ける。古来より風が吹かぬ日は無いと言われ続けてきた。

しかし、この日、この時、この場所だけ……。一瞬、世界中の風が止まつた気がした。

その瞬間、草むらから数名の男達が飛び出してくる。言つまでもなく守清配下の忍び達である。

忍びとは基本、主の命には忠実である。火の中に飛び込めと言えば飛び込む、死ぬと言われば死ぬ。そう言つ生き物である。だが・・・この時だけは違つた。部隊を率いていた守清の命も無く清則達を取り囲んだのだ。

この時彼らは共通の感情を抱いていた。

-----恐怖。

忍びとは感情を抱かない生き物である。例えどんな状況下であろうと任務を遂行する為の道具であると自分を見なしているのだ。

しかし、田の前に立つ一人の男から滲み出る殺氣に恐れを抱いていた。殺氣を身に纏いまるで貴紳の」とを姿に怯えも抱いていた。

そして彼らはこの男の前に立つたことを心底後悔した。

その男はまるで長坂橋で赤子を抱えながら百万もの大軍の中を駆け抜けた唐国の猛将・趙子龍のように見えたに違いないだろう。

きつと彼らは自分が名も無き雑兵のように思い。『この男には勝てない』と心底恐怖し、不甲斐なくも膝が震えてしまった。

「ほう？ そつちから出向いてきてくれるとなまな・・・」

清則が声に殺氣を孕ませて呴いた。その声に気を呑まれたのか絶好の位置に立っていた忍びですら彼に手出しが出来なくなっていた。

「少くとも、お前がお前らのことを知らぬことはないだろ？」

忍び達が一斉に清則に向かつて手裏剣を投げつけた。ならば手裏剣で殺せばいいと判断した為である。懐に潜れない

だがその手裏剣も清則の前に出された槍によつてはたき落とされた。忍び達が槍が投げられた方向を見ると一人の少年が立つていた。

「へへつ。貸し一つだな」

慶次が少年らしい笑みを浮かべて言った。忍び達は任務を邪魔され
た怒りからかその矛先を慶次へと向けた。

「餓鬼が！！舐めるな！！」

「子供だと思つて甘く見るな――忍び退治など造作もない――」

一人の忍びが慶次を盾にしようと掴みかかつた。だが、慶次は逆に彼の腕を掴むと地面を勢いよく地面に叩き付けた。

慶次が地面に大の字になつて倒れる忍びを踏みつけて咆哮する。それもそのはず、慶次は元々前田の人間では無いのだ。

叔父は伊賀忍びの出とも言われている滝川一益が甥の滝川益氏である。その妹を義父・前田利久が娶り、慶次が誕生した。

つまりは慶次も伊賀の忍びの血を少なからず受け継いでいるのである。

だが、それよりも驚いたのは自分たちが忍びであることを看破されたことである。棄民や夜盗に変装したのを見破られたのはこれが始めてであったのだ。

「ふむ、忍びとな？ならば無用に殺生することは憚びない・・・」

そう清則は忍び達を睨み付けると太刀を鞘に戻し拳を握り締めた。つまりは他国に仕える忍びを無闇に斬つて被害が及ぶのを避ける為である。

だが忍びから見れば侮辱に他ならない。忍びと言えども武家に仕える身としてそれなりに武士道の心得がある。丸裸同然の相手を斬つても何の誇りにもならないのだ。

「おのれ・・・ふざけおつて!-!」

忍びとしてではなく、武人として憤慨した忍びの一人が清則に殴りかかつた。斬りかかつたのならば僅かながら勝ち目はあつたかもしれない。

何故なら殴りかかった瞬間に清則の拳打が彼の鳩尾を打つた。いや、打つたと言つるのは間違いだろつ。

文字通り鋭い槍のように彼の鳩尾を穿つた。その衝撃からか彼の体は草むらの中まで吹つ飛ばされた。

たかが拳打と侮るなれ、彼ら武人は戦場では口の全てが武器と化す。手足は金槌のような鈍器と化して時には相手を絶命させるに至る威力を出すのである。

だが清則は手加減をした。彼の頭骨を叩き碎くことも、心臓を止めることも造作も無いことではある。だがあくまで殺すつもりは無く手加減をした。

しかし、手加減をしているとしても・・・彼を氣絶させるには十分な威力があった。

「どうした？ もう終わりか？」

清則が骨をコキコキと鳴らしながら聞く。その姿はまさに猛虎に匹敵する重圧感を漂わせていた。

この時、忍びの中には川中島の戦いで諜報に当たつていた忍びもいた。彼は毘沙門天の化身と讃れ高い上杉謙信の姿を、今も鮮明に覚えている。

法衣装束に身を包み、まるで本当に毘沙門天が舞い降りたかのような神懸かり的な采配を見た。だが、それ以上に彼自身から放たれる威圧感を今も覚えている。

全ての生き物が彼に屈し、立っていることすら不敬に当たるような威圧感。もし、正面から睨み付けられたら、それだけで心臓が握りつぶされるような殺氣だった。

守清は草むらの影から部下達の戦いを、まるで苦虫を噛み潰したような顔で見ていた。

なんたる無様、なんたる無謀、なんたる無策。北条が風魔衆にも匹敵すると言われた武田の忍衆にあるまじき戦い様だ。

だが、それと同時に・・・彼の武人としての血が疼き始めていた。

『この男と戦いたい』。

それは戦国最強を自負する武人であれば、誰もが望むであろう願望。そして同時に、乱破衆の頭として、自分は影に徹しなければならないと言ひづら制心も働いた。

本当なら、直ぐにでもここから飛び出して彼と手合わせしたい。だが、忍びの頭である自分が負ければ、武田の権威も地に落ちるやもしけぬ。

（どうしたものか・・・）

守清が葛藤に悩んでいると、ふと後ろに人の気配を感じた。忍びが後ろを取られるとは何という無様なッ！

「む？ 守清殿ではないか、このような所で如何した？」

「だ、弾正忠様！？」

高坂弾正忠虎綱、後の世では高坂弾正忠昌信と伝えられるその人である。

武田四名臣が一人。先の川中島の戦いでは妻女山の別働隊を指揮し、信玄を窮地から救つた知勇兼備の名将である。

また、『逃げの高坂弾正』と言つゝ渾名の通り。慎重な采配と見事な退却戦指揮能力を持ち合わせおり信玄に大変重宝された人物である。ここで補足するが、この時代の戦は攻めより退却戦の方が遙かに困難なのである。

何故ならば、退却ともなれば味方は浮き足立ち、足軽達は我先にと逃げ出すのが常である。そんな中で指揮を執るのは非常に困難である。

更に敵は勢いづいて追撃してくるであろう、その追撃を引き留めるか。あるいは何らかの策を用いて敵を足止めする、殿役と言つても過言ではないだろう。

また、高坂弾正と言えば四名臣の中で最後まで生き延びた一人である。（山県昌景・馬場信春・内藤昌豊の三人は長篠合戦で討死にしている）

今は海津城代として対上杉の備えをしているはずの御人が、何故甲府にいるのかと守清は不思議に思った。

「ハツハハハ。ちと御館様に用があつてな。その帰り道じや」

あつさりと笑いながら高坂は応える。そのあつけらかとした態度に守清は少々呆れながらも、頬もしげ思つた。

「それこ・・・なにやら戦の気配がしてな。したらば、せひお主がおる訳だ。これはただ事ではなかうつ?」

流石は四名臣随一の知将と讃れ高き高坂である。直ぐにこの場の異変に気が付き、直に守清を問い合わせた。

守清は『流石は高坂弾正様じゅ』と観念し、信玄から『えられた任務について話した。本来なりば忍びとしてあつてはならないことだが、相手は武田の重臣である高坂に話したところで向ひ咎められることはないだらうと踏んだのだ。

一方の高坂は守清の話を聞くや否や、少し呆れたような顔をして清則達に目を向けた。

「・・・ほう、なかなかに良い面構えをしてある。御館様が『執心なのも肯けるが・・・何、ワシに比べればまだまだじゅな。しかし・・・」

高坂が清則の姿を確認すると、からかんらと笑つて応えた。高坂と言えば信玄の衆道の相手をさせられたことでも有名である。

この時、高坂は信玄が新たな小姓を探しているのだろうと思つていたが。彼から放たれる鬪氣を感じ取るや否や、考えを改めざるを得なかつた。

「どれ、ワシが相手をしてくるとするか

「だ、弾正忠様！！危のうござりますーー！」無礼ながひ、ここは私が！！

守清が追いすがるように高坂を止めようとしたが。高坂はクルリと振り返ると実に清々しい笑みを浮かべた。

「ほほう？お主はワシが、あの童に遅れを取ると申すか？それこそ無礼じやぞ。」

実際に武人らしい笑顔を浮かべ、高坂は草を搔き分けて行つた。高坂の武勇を知つている守清は彼を説得する言葉を見つけることが出来なかつた。

第五話～異形の構え～

高坂と守清が話をしている間、清則達と忍びの間にも動きがあった。どうしたものかと攻めあぐねていると、旅の一一行の中に女性の姿を見つけたのだ。清則の恋人であり、半兵衛の娘である千里である。これ以上、無様な姿を見せつければ武田の沾券に関わると踏み、強攻策に出ざるを得なかつた。

「き、貴様！－何を！－」

「退けッ！－女、来い！－」

「きやつ…－は、離しなさい…－」

千里を庇つよう立ちはだかつた小一郎を体当たりで弾くと、千里の首を腕でがつちりと固め、人質としたのである。

「清則殿！－千里殿が！－」

官兵衛が慌てて清則に叫んだ所で、清則と慶次は己の迂闊さを恥じた。

正面からの戦では敵わぬとなれば、搦め手を攻めるのは兵法の常道である。当然、自分たちの弱点である千里に手を出すはずだったのだ。それをすっかり忘れてしまつていたのだ。

「ひ、卑怯者め！－武人としての心意気は無いのか…－」

「黙れッ！大人しく降参しないと、この女の首を折るぞ……」

慶次が一喝するも、恐慌状態に陥った忍びは聞く耳を持たず。ギリギリと千里の首を締め上げ始めた。

これには流石の清則も一の足を踏んだ。千里は自分の思い人であり、それを田の前で殺されるのは耐え難い苦痛に他ならない。

「こん……のッ……千里殿を離さんか……」

小一郎が手近にあつた石を掴み、忍びの頭を思いつき強打する。流石に強靭な肉体を持つ忍びと言えども、この一撃は堪えたらしく、千里を手放してしまった。

・・・それが彼の運の尽きだった。

彼がくらくらする頭を抱え、立ち上がった時。彼の目の前に清則の姿は無かつた。文字通り、視界から完全に消えていたのだ。

「う、上じやーー！」

仲間の声でハツと上を見上げれば、跳び蹴りの姿勢で今までに自分に突つ込んでこよつとする清則の姿が見えた。

この時、忍びは本能からか顔を両腕で庇ってしまった。誰もが顔が攻撃されよつとすれば顔を防げよつとするものである。

だが、彼は「」で三つ田の間違いを犯してしまった。

一つ目は千里を人質にとつてしまつたこと。

二つ目。本気で清則を怒らせてしまったこと。

そして。三つ目は、避けずに入撃を許してしまったことである。

重さ数十キロはあると言われる鎧を身に纏い、戦場を駆ける武将。更に清則は元は農民である、故に足腰の強さは並の人間とは桁外れの強さを誇っていた。

そんな彼の跳び蹴りである。 とても、両腕だけでは防ぐ」となび出来ようものか。

ボギボギと忍びの両腕から骨が砕ける音が響き。あらぬ方向へとグニヤリと曲がる。折れた骨は筋肉を突き破り皮から出てしまつてい る。

腕は二度と使い物にならないであろう。痛みは耐えられる物ではない。拳げ句、怪我の度合いから彼の両腕に激痛に忍びが吠える。忍びと言えども・・・いや、誰であろうどこ

痛みに悶え苦しんでいるにも関わらず容赦なく、清則の蹴りが飛ぶ。今度の彼の狙いは首の骨である。

人間の骨で重要な箇所は背骨と首の骨である。各種神経が通つてゐるそこを折られた場合、即座に体の全ての機能が停止し、確実に死に至るのだ。

その瞬間、彼は自分の愚行を悔いた。だが、既に時は遅く・・・全てに判決を下す閻魔の鉄槌は下ろされてしまった後である。

ボギイと重い音が上田原に木靈する。彼の首はくの字にひしゃげ折れ、白田を向きながら崩れ落ちた。

「次は・・・誰だ？」

ハアーハアーと肩で息をしながら振り返る鬼神。自分が倒した敵には目もくれず、次の敵を求めて忍び達を一睨みする。

もはや誰もが敵わぬと心胆が氷り付いたその時である。上田原に飄々とした声が響き渡つた。

「ハツハハハ。まさに鬼神よのぉ・・・」

怖じ気づいてしまつた忍び達を搔き分けながら清則の前に立つ男。誰であるか、高坂彈正忠虎綱その人である。

忍び達は彼を見るや否や、地面に膝を立てて頭を垂れた。その姿から清則も彼がただ者では無いことを武人の勘で感じ取つた。

「貴公がこの忍びの元締めか？」

「いや、違う。ワシは武田の一家臣じゃ」

殺氣を向けてくる清則に対し、悠々と自己紹介をする高坂。流石は武田の名臣、殺氣と血まみれの戦場を抜けてきた強兵は殺氣如きには遅れを取らぬと言わんばかりの態度である。

「武田の家臣がワシになんの用だ?」

「ハツハハハ。流石は織田の鬼須藤と言つた殺氣じや」

高坂の言葉に清則の眉がピクリと揺れる。一応、隠密での旅となつており、田の前の男が自分の名前を知つてゐるとは思つてもいなかつた。

「何故・・・」

「何故、お主の名前を知つてゐるかと?簡単な事じやよ、お主が隠密の旅に出るには・・・ちと有名になりすぎたからじやよ。今川攻めであれだけの武功を挙げれば、嫌でも名は知れるもんじやよ」

「・・・」

「ハハツ、自覚は無しか。本当に変わった男よ

「それで、何が望みだ?」

「ふむ。ようやく本題に入れるな・・・お主、仕えるべき主は見つかつたか?」

「いや、諸国見聞の最中だが」

「ならばよい。单刀直入に言つ・・・御館様にお仕えせぬか?」

「・・・嫌だと言つたら?」

「お主程の男が上杉に付くのも脅威じや・・・」ヒヒで斬る

瞬間、二人を包む空気が一変する。高坂も温厚そうな顔に溢れんばかりに鬪氣を滲ませて、清則と間合いを計る。

清則は直感で素手での勝負は危険だと判断した。高坂は半身を捻り、拳打の構えを見せているが、右手は常に太刀の柄を握りしめていたのだ。

もしも、素手で殴りかかるう物ならば間接を捻り上げられて抜き身の一刀の元に斬り捨てられるだろう。

飛びかかったとしても避けられてしまえばそれまでである。どう考へても素手で相手をするには分が悪いとしか思えなかつた。

そう判断した清則は、右手で槍を握りしめ、左手で小太刀を握りしめて構えた。

異形の構えに高坂は背中に嫌な汗を搔いた。槍で掛かつてくれば懷に入ればよい、だが小太刀を持つことで懷に入られた時の備えも出来ている。まさに戦場で培つた戦智が結集された構えだつた。

「・・・」

「・・・」

両者が睨み合つて既に半刻が経過しただろうか。それでも両者は動かない。この仕合は先に動いた方が負けであると両者は直感で悟つていた。

ただ無駄に時が流れるだけの上田原。一人は互いに睨み合つたまま動かない・・・直ぐ傍に忍び寄る影にも気が付かぬまま・・・。

第六話 清則、英雄を論じる

「その死合ツ！…待つた！」

突然の叫び声に一人は同時に声の主の方を向く。着物を着た老人と才気活発そうな若者が数百の兵を率い、一人を取り囲んでいたのだ。

「守清からの連絡が遅いと思つたら…何故、源助（高坂の幼名）がここにあるのだ？」

「幸隆殿…」

「源助、御館様の用事は終わつたのだろう？ならばさつさと海津城に帰るがよい、上杉めの備えであるお前が城を開けてどうする」

「…・分かりました」

高坂はまるで親に叱られる子供みたいに頃垂れると、清則に目配せをし海津方面へと歩いて行つてしまつた。

流石の高坂と言えども、信玄から全幅の信頼を受けている幸隆には逆らうこと出来なかつた。

それ以前に、高坂は幸隆のことを師と仰いでいる部分が少なからずあり。真田の一族とは懇意な仲もある。

勝負に水を差されたと言わんばかりに不機嫌そうな清則の視線に気が付いたのか、幸隆は清則に向かつて深々と頭を下げ始めた。まるで一国の城主に対するよつやな礼である。

「上田城城主、真田幸隆と申します。某の領内で夜盗に襲われると
は、某の不徳とするところです。どうか、平にご容赦を」

「幸隆が三男、昌幸と申します。せめてもの謝罪として、今夜は我
が城にお泊まりいただけないでしょうか?」

ヤケに腰の低い態度に清則は一瞬、解答を躊躇つたが。田の前の老
人と青年から殺氣も鬪氣も漂つて来なかつた為、素直に従つことを
選んだ。

上田城

城に付いた一行は現地で採れた山河の珍味と真田の名酒で持て成さ
れ、すっかり気分を良くしていた。

宴もたけなわと言つた所で、幸隆は『この上田城には湯治場がある
ので、そこで汗を流しては如何か?』と薦められたので、清則は少
しだけ酔いの回つた千鳥足で湯殿へと向かつた。

「某が」案内致します

昌幸が先頭に立ち、清則を案内して行く。

上田城はさほど大きな城では無いが、この時代の城には侵入者対策
用の罠が多数設置されており、城によほど詳しい者でなければ、忽
ち命を落す危険があつたのだ。

「面田ない・・・」

清則はフラフラと壁に手を付きながら、畠幸の後に続いた。真田の名酒である濁り酒をしこたま飲んだせいで頭は重く、考えることすら億劫になっていた。

そして、ヤケに大きな一枚戸の前で畠幸はピタリと足を止め、『ここが湯殿になります』と丁寧に通した。

戸を開けると、そこには脱衣所になつており。その先には天然の岩肌に囲まれた露天風呂となつていた。

「お～。これは見事な」

まるで真田の秘湯と言わんばかりに広い露天風呂に清則はすっかり感心していた。

素早く着衣を脱ぎ捨てると、褲も脱ぎ捨て。子供みたいに湯に飛び込んだ。

乳白色の湯は熱すぎず、温すぎずと文字通り適温で。こんな広い露天風呂を一人で味わえるとは、まるで大名になつたような心地がした。

「絶景かな・・・ふあ～・・・」

体が温められることにより、体内のアルコールが活性化され。清則の酔いは極限に達してしまい、筋肉にもたれ掛けたまま船を漕いでしまった。

どれぐらい眠つていただろう。脱衣所に誰かがやつてくる気配に清則は目を覚ました。

きっと真田の者だろうと清則は安心しきり、バシャバシャとお湯で顔を洗い始めた。

「・・・様！・・・も・・・に・・・」

「・・・ぬ・・シ・・・十分・・や」

ヤケに騒がしいなと清則は怪訝な顔をしたが、戸が開くと同時に何故揉めていたかの理由が分かつた。

初老の男性が幸隆・昌幸と小さな子供を引き連れて、湯殿に入ってきたのだ。清則は幸隆達に軽く会釈すると初老の男性をチラリと見た。

とても初老とは思えぬ程引き締まつた体。まるで千里先まで射抜くような鋭い視線に、威厳たつぱりと言つた顔をした坊主頭の男性だった。

それ以上に体中に刻まれた傷から、彼がただ者では無いと言ひ気配を感じ取つて、自然と身構えてしまつた。裸にもかかわらず、その体からただ漏れる重圧感に清則は息を呑んだ。

「幸隆殿。そのお方は・・・どなたか?」

清則の問いかけに幸隆は身を強ばらせた。余程位の高い男なのだろうかとタカをくくつっていた。

「何、ただの隠居の爺じやよ。」「一緒にしてもよろしいかな？」

初老の男性がカラカラと笑いながら歩み寄ってきた。清則は少し考え込むと、静かに頷いた。上田城に隠居なんていったかな？と首を傾げるが、体中に回ったアルコールからか考えるのを止めた。

すると彼は清則の隣に腰を下ろすと、深い溜息を付いた。その姿が何とも性に合つてこむなと清則は苦笑する。

一方の幸隆達はどうにも落ち着かない顔をして、一人を取り巻くような形で湯に身を沈めた。

「やはり湯は良いの。この世の憂きを洗い流してくれる心地じや

「「」お体と言えども、世に憂きを感じるのですか？」

「この戦乱の世に生きる者と云ふのは当然じや。戦ともなれば民は苦しみ、土地は荒れ果てる・・・それは見るに耐えないもんじやよ」

「では、お体は誰が天下に近いと思しますか？」

清則が何気なく投じたこの疑問に、幸隆達は苦笑いを浮かべて解答を待つた。

彼はしばらく考え込むような素振りを見せると、濡れ手ぬぐいを頭に乗せ、静かに語り始めた。

「天下に近いだけじや駄目じや。天下の主に相応しい器でなければ、天下は治められん。足利も器に相応しくないから・・・こうして世

が荒れたのじやよ

「なるほど、正論ですな」

「お主は誰が天下人に相応しいと思ひへ？」

「そつですな。織田信長公はどつですか？」

「信長か。ヤツは確かに強いし、家臣を上手く統率しておる。だが、恐怖による統治は長続きしないのが通例じや」

「・・・徳川家康公は？」

「ヤツは長じ田で見れば・・・一番天下に近いかもしれん。だが、まだ若すぎる。世の酸いも甘いも知らなければ天下を治めることが出来ん」

「では、武田信玄公はどつですか？」

その言葉に彼も幸隆達もピクリと動く、单なる興味からであつて、別に深い意味はなかつた。

彼はふうと溜息を付くと、ゆっくりと夜空を見上げて呟き始めた。

「・・・信玄か、ヤツは駄目だな。とてもじやないが、天下を治める器では無い」

「今や破竹の勢いと言われる武田家でも・・・駄目だと？」

「ああ、全く持つて駄目だ。信玄は人間ではなく、畜生じや。甲斐

を手に入れる為に実父を追放し、今川を攻める為に実子を死に追いやつた・・・。ヤツが天下を治める器では無いことは明白よ

その答えに清則はギョッとした。武田家の重臣である真田一族を前に、これだけ主君をボロクソに貶められれば、その場で斬り捨てられても文句は言えないのである。

だが幸隆を始め、真田の者達はどこか悲しそうな顔を浮かべて俯いたままだった。

「信玄も駄目となれば、北条・上杉・毛利・大友も駄目じゃな。今はこの日本に戦乱を収める英傑がおらんのが・・・ワシの憂いじやて」

「なるほど・・・」

「それより、お主。信玄に会つてみたくはないか?」

「信玄公に?」

「ああ。お主なら、信玄の信玄を止めることが出来るかもしれぬな

期待に満ちた目を向けられ、清則は慌てた。甲斐の虎である信玄公を自分如きが止めるなどと・・・そんなことが出来ようはずはない」と答えた。

「あの平八郎を止め、今川に引導を渡したお主なら出来よ。そして、もつ遅い。ワシはこれで帰るとしてよ!」

彼はそう言つと立ち上がり、真田の一族を引き連れて風呂から上が

つていった。残された清則はしばらく考え込む素振りを見せると、静かに立ち上がりて湯殿を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5905a/>

戦国鎮魂歌～ある漢の天下取り～

2010年10月8日23時13分発行